

富山県大門町

串田新遺跡 II

—北東地区の範囲確認調査—

1981年3月

大門町教育委員会

序 文

当町をはじめ射水郡は、富山県内でも古くから開かれた地域のひとつで、町の南方に連なる丘陵地帯には各時代にわたって遺跡が数多く散在しております。

近年、県内でも各種の開発事業に伴なう埋蔵文化財の発掘調査が数多く行なわれていますが、これらの遺跡の大半は調査後、破壊されているのが現状で、開発事業の要請と文化財保護との調和の困難さを反映しています。私達の祖先が残した貴重な文化財を子孫へ継承させていくことは、現代社会に生きる者の使命のひとつと言えましょう。

幸にも串田新遺跡は、県教育委員会、文化庁の適切な指導助言と地元の土地所有者各位の暖かい御理解により、昭和51年9月には国史跡の指定を受け、昭和53年度より環境整備事業を継続実施し、これまでのところ、縄文時代の住居址や北東部の墳墓の復元整備をはじめ、休憩所、便所、水呑等の諸施設の整備を行ない史跡公園としての内容を大分整えてまいりました。今後、遺跡北東地区の整備や出土品展示施設として資料館等の建設を行ない、大門町のみならずひろく県下の歴史的風致地区として活用していただく計画であります。

なお、今回、町単独事業として行なった北東地区の範囲確認調査は、基本計画において才二次整備計画区域（未指定地）とされる箇所の学術的な実態の究明を期して行なったものであります。本報告書にもらられたこれらの調査の成果は、今後の整備計画に十分活かしていきたい思います。

この事業の遂行にあたり、文化庁、県関係機関のご指導と、深いご理解をもってご協力いただいた地元の土地所有者各位、また今日まで寄せられた関係諸氏のご労苦に感謝いたしますとともに、なお一層の御指導、御協力を願い申し上げて発刊のことばにかえたいと思います。

昭和56年3月

大門町教育委員会

例　　言

1. 本書は、大門町教育委員会（教育長、岡本甚三）が、昭和55年3月に実施した串田新遺跡の北東地区の範囲確認調査の報告書である。
2. 調査事務は、大門町教育委員会職員の協力を受け同文化財担当主事、中山修宏が担当し、同教育次長山崎豊吉、土田慶蔵（前任）が総括した。
3. 発掘調査及び出土品整理は、中山が担当したが、出土品整理にあたっては下記の諸氏の協力を得ている。
 - 藤原尚、堀川明美、俵里美、藤田雪香、布上洋子（土器復元）
 - 松井政信、高田典子、池田文子、開口真弓（土器実測及びトレース）
 - 春田保二（写真撮影）（順不同敬称略）
4. 本書の編集、執筆は、主に中山が行ったが、IV-1、先土器時代の遺物の項は麻柄一志氏による。
5. 出土品整理にあたっては、下記の諸氏より関連資料等について貴重な御教示をいただいた。記して謝意を表します。

橋　本　　正（富山県埋蔵文化財センター）
上　野　　章（富山県埋蔵文化財センター）
藤　田　　富士夫（富山市考古資料館）
伊　藤　　隆　三（小矢部市教育委員会）
吉　岡　　康　暢（石川県立郷土資料館）
南　　久　　和（金沢市教育委員会）
中　司　　照　世（福井県教育委員会文化課）（順不同敬称略）
6. また、今回の調査事業に理解と協力を示された地元関係各位、並びに調査期間中に来訪され貴重な助言をいただいた各位に末筆ながら謝意を表します。

〈発掘調査参加者〉

折橋卯一、大居晴信、山崎長太郎、沢井武雄、大坪四郎、森川勇次、高田為治、高田康、山盛伸正、高田花子、山本未子、高田英子、平柳ひとみ、県立小杉高校生徒29名、

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I. 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
1. 遺跡の位置と過去における調査	1
2. 周辺の遺跡	2
II. 調査に至る経緯と経過	6
1. 調査に至る経緯と目的	6
2. 調査の経過	7
III. 調査区とその概要	8
IV. 発見された遺構と遺物	11
1. 先土器時代の遺物	11
2. 古墳時代初期の遺構	12
3. 古墳時代初期の遺物	16
V. 総 括	32
1. 出土土器とその年代	32
2. 集落と墓群の構成	35
3. まとめ	39
註	41
引用参考文献	42

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 射水丘陵付近の弥生時代末～古墳時代初期の遺跡	4
第3図 第1調査区概念図	8
第4図 第2調査区概念図	9
第5図 第1調査区土層図（南壁）	10
第6図 第2調査区土層図（南壁）	10
第7図 先土器時代の石器	11
第8図 第1・5号住居址実測図	12
第9図 第2・3・4号住居址実測図	13～14
第10図 第1号住居址出土土器実測図(1)	20
第11図 第1号住居址出土土器実測図(2)	21
第12図 第2号住居址出土土器実測図(1)	22
第13図 第2号住居址出土土器実測図(2)	23

第14図	第3号住居址出土土器実測図(1).....	24
第15図	第3号住居址出土土器実測図(2).....	25
第16図	第4号住居址出土土器実測図(1).....	26
第17図	第4号住居址出土土器実測図(2).....	27
第18図	底部実測図.....	27
第19図	第1号墳実測図.....	37
第20図	第2号墳実測図.....	37
第21図	第3号墳実測図.....	37
第22図	第1・2号墳出土の土器.....	38
第23図	住居群と墳墓群の位置関係図.....	39

表 目 次

第1表	各住居址出土土器の器種構成.....	18
第2表	出土土器観察表(1).....	28
第3表	出土土器観察表(2).....	29
第4表	出土土器観察表(3).....	30
第5表	出土土器観察表(4).....	31
第6表	各住居址の所属時期想定表.....	34

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景（西側平野部より望む）
図版2	第2・3・4号住居址 第2号住居址
図版3	第3号住居址 第4号住居址
図版4	第1号住居址 先土器時代石器出土グリッド（第2調査区A-8）
図版5	土器出土状況（第1号住居址） 土器出土状況（第2号住居址）
図版6	土器出土状況（第3号住居址） 土器出土状況（第4号住居址）
図版7	甕形土器 高坏 鉢形土器

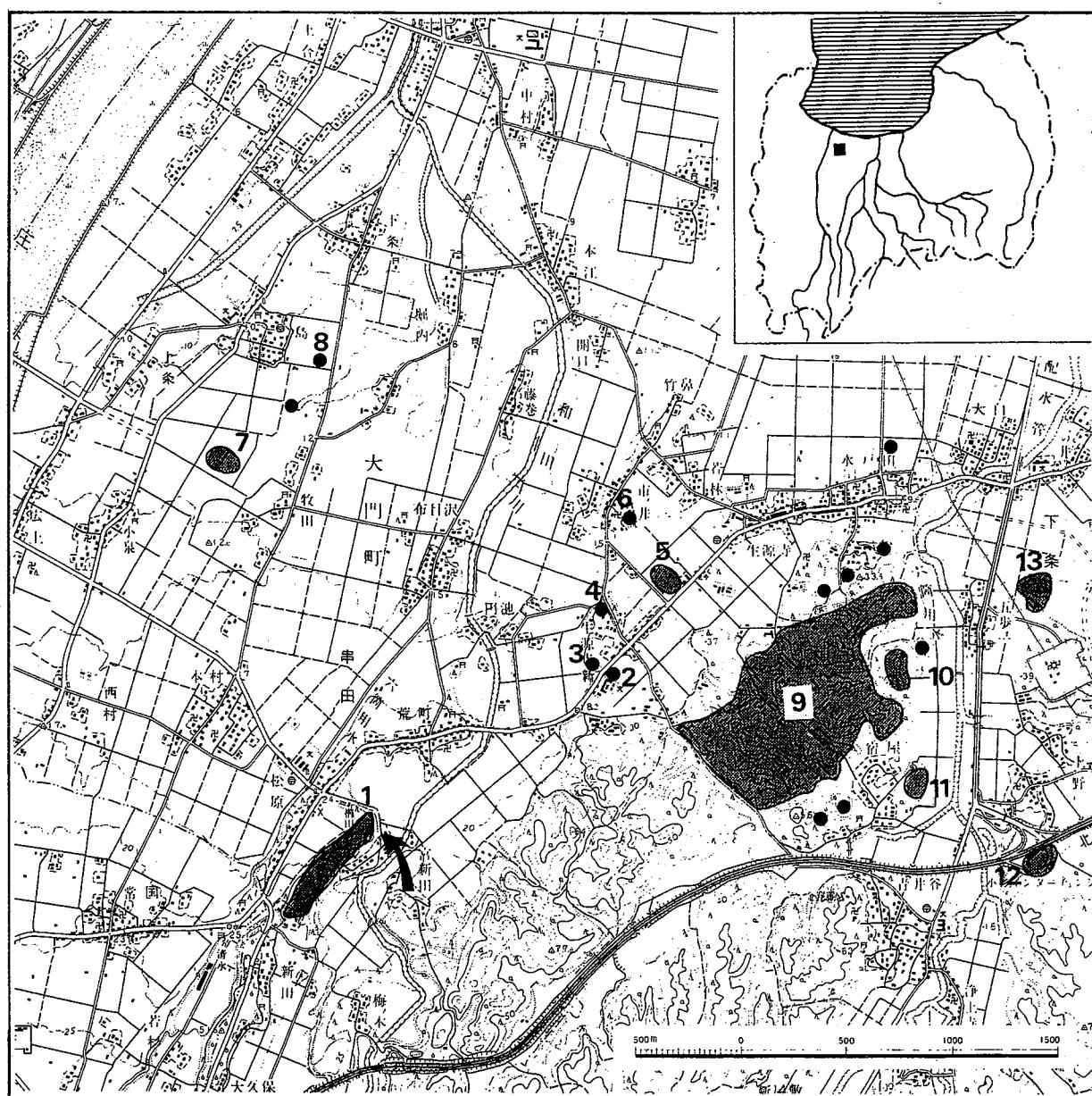
卷末付図 串田新遺跡地形図

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の位置と過去における調査

串田新遺跡は、富山県射水郡大門町串田新の通称「大沢山」と呼ばれる独立丘陵上に所在する。大門町の中心街から南方におよそ5kmほどの位置にあたり、付近は開闢した田園が取り巻き、東側には和田川が蛇行しながら北方へ流れている。

この「大沢山」は、標高約45~46mで、広さは東西約150m、南北約450mにわたる細長い形状の独立丘陵であり、平野部と約10~16mの比高差がある。「大沢山」の東側は、和田川の浸食によって急峻な崖状をなしており、和田川を挟んで対岸に射水丘陵が広がっている。また西側は、



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 串田新遺跡 2. 生源寺新遺跡 3. 生源寺新B遺跡 4. 大塚古墳 5. 生源寺遺跡 6. 市ノ井遺跡
7. 小泉遺跡 8. 島鉢田遺跡 9. 流通業務団地内遺跡群 10. 五歩一古墳群 11. 宿屋古墳
12. 上野遺跡 13. 日ノ宮古墳群

庄川によって形成された広大な沖積平野がひろがり遠く高岡の二上山を望むことができる。

本遺跡付近は、射水丘陵の西端にあたるが地質的には、丘陵部は主として泥岩及び砂質泥岩の互層などの、ある程度硬化した堆積岩の地層から形成されている。また、所々に高位段丘礫層が泥岩等の基盤岩を覆って分布する。この基盤岩になっている泥岩は、青井谷泥岩と呼ばれる新第三紀中新世の海成層である（呂本、1981）。

ところで、本遺跡は繩文時代中期後葉の編年的示標となる「串田新式」の標式遺跡としてかねてより著名であり、調査研究の歴史も長い。昭和24年（1949）に、県立小杉高等学校地歴班によって、射水郡ではじめて繩文時代に属する遺跡として調査されたことにはじまる（小杉高校地歴班、1952）。この時に得られた出土資料にもとづいて山内清男博士が、北陸地方の中期後葉を画する串田新式土器を設定したわけである。

その後、昭和46年（1971年）に富山考古学会の湊農氏らを中心に、大門町教育委員会が調査を行ない、翌47年（1972年）には、県教育委員会によってさらに詳細な調査が行なわれた。その結果、昭和51年9月（1973年）に国の史跡に指定された。この昭和47年の調査では、繩文時代中期後葉に属する住居址1棟、石組炉址6基の遺構が検出され、さらに丘陵南東部一帯には相当の住居址が有るものと推定され、台地上に繩文時代中期後葉の集落が展開していたことが明らかにされた。また、それまで所属時期及び性格については不明であった丘陵北東部に所在する「古墳」についても調査が行なわれた。調査が行なわれたのは、最も大きな墳丘をもつ第一号墳と二号墳であるが、両者とも古式土師器が検出され古墳時代初期に属するものであることが判明した（橋本・神保、1973）。これらの「古墳」は、現在の時点で捉えなおせば、所謂墳丘墓と定義されるものの一類型と言えるのではないだろうか。この「古墳」の位置づけについては、今回の調査結果とも関連して後章で述べたい。

ところで、串田新遺跡は、国の史跡に指定されたのち、昭和53年度より国、県の補助を受け環境整備事業を継続して行なっており、昭和57年度で第一次計画区の整備を完了する予定ですめられている。今回の調査は、基本計画において継続実施を予定している第2次計画区（櫛田神社寄りの北東地区）の環境整備のための資料を得るためにある。

2. 周辺の遺跡

串田新遺跡の周辺の丘陵や平野部には、各時代にわたる数多くの遺跡が存在する。本遺跡をめぐる射水丘陵とその平野部は、ひとつの景観的まとまりを示しており、越中の原始古代史のなかでも特異な位置を占めている。ここでは、今回の調査成果との関連から弥生時代末期～古墳時代初期という極めて特徴的な時期の遺跡を中心に、周辺の遺跡について概観したい。

先土器時代に属する遺跡で、比較的性格のつかめる遺跡は、小杉町上野遺跡、同町黒河遺跡であるが、その他にも今回の調査で得られたような石器及びフレイクが1点ないしは数点程度の遺物で構成されるユニットの不明確な小遺跡は、大門町生源寺新遺跡（西井、1972）や太閤山丘陵

の諸遺跡など射水丘陵上において数多くあるようだ。

繩文時代では、前期の遺跡は、小杉町石坂遺跡（木倉、1959）、同町囲山遺跡（橋本、1970）、同町上野遺跡（橋本、1974）において前期中～後葉の土器が発見されている。最近、大門町小泉よりも^(註2)前期後葉の土器が検出されているが、遺跡は庄川右岸の新扇状地上にあり、極めて特異な立地傾向を示している。

中期になると富山県においては遺跡は全体に増加する傾向にあり、中葉から後葉にかけてピークに達するが、当地域においては、中葉から後葉の遺跡はかならずしも多くなく、前葉に属する遺跡が多く見られる。中期前葉に属する遺跡としては、大門町生源寺新遺跡（小島、1972）、小杉町太閤遺跡（富山県教委、1965）や同町中山南遺跡（橋本他、1971）、同町上野遺跡（橋本、1974）があるが、いずれも出土遺物がそれほど多くなく時期的にも限られているようだ。中葉では、金山丘陵北部に所在する小杉町水上谷遺跡（橋本、神保、1974）があり、中葉から後葉では串田新遺跡がある。また、串田新遺跡の南方に位置する芹谷野段丘上には、砺波市巖照寺遺跡（神保他、1977）、同市富森新北島I遺跡（神保他、1978）などいすれも中期前葉に属する遺跡が所在する。

串田新遺跡では後期初頭まで継続して営なまれるが、それ以後、当地域においては遺跡数が急激に減少するようで、後、晩期に属する遺跡で周知のものは、小杉町黒河新遺跡ぐらいである。

弥生時代になると後期より、大門町市ノ井遺跡や上野遺跡、囲山遺跡などの諸遺跡が出現するが、弥生時代終末期～古墳時代初期にかけて、下記のように、かなり多くの遺跡が散見される。

1. 大門町串田新遺跡（橋本・神保、1973、本報告書）

古墳時代初期のものと思われる円丘状の墳墓が3基丘陵上に現存している。以前には、全部で5基以上あったと伝えられている。また、隣接して丘陵上には該期に属する集落がある。

2. 大門町島鉢田遺跡（上野、1972）

耕地整理の際に偶然、古式土師器等が発見された遺跡で、沖積地（庄川右岸の自然堤防）の微高地上に立地する。古墳時代初期の集落址と思われる。

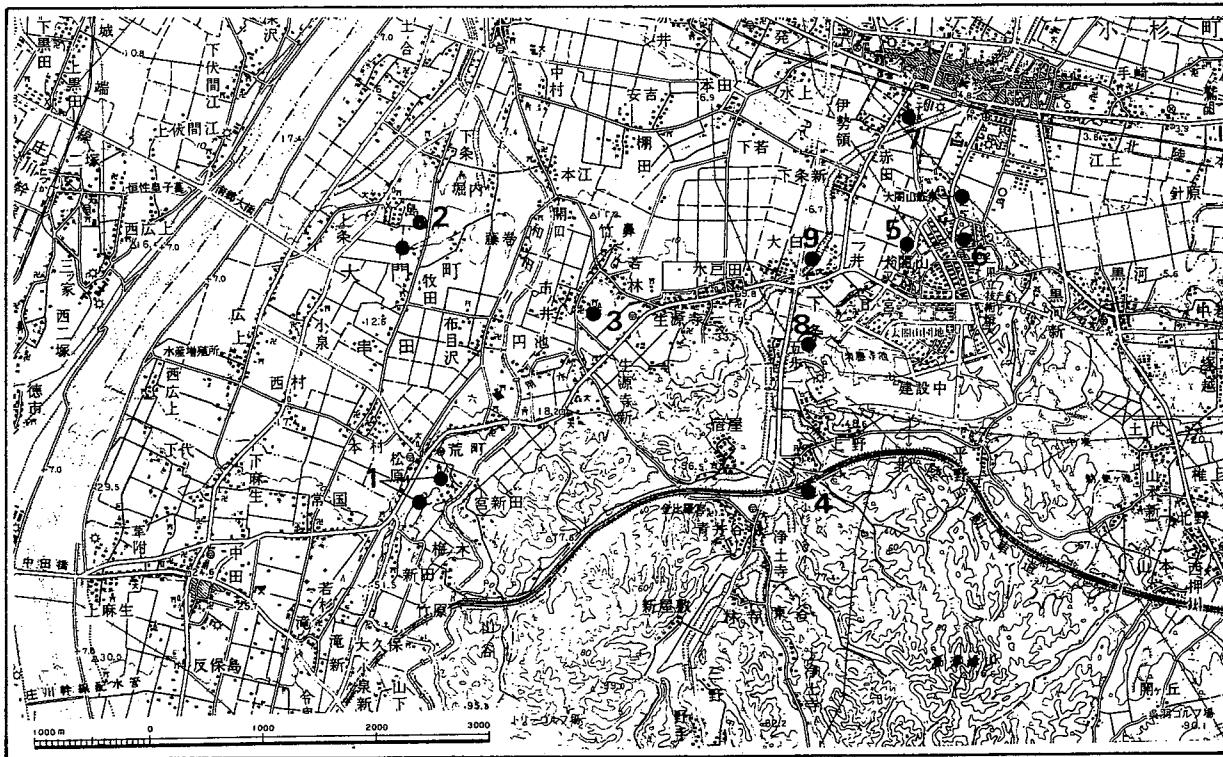
3. 大門町市ノ井遺跡（上野、1972）

和田川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡で、耕地整理の際に弥生時代後期の土器が発見された。弥生時代後期の集落址と思われる。

4. 小杉町上野遺跡（橋本、1974 a）

先土器時代、繩文時代前・中期・弥生終末期～古墳時代初期より、近世にわたって三台地に広がる大規模な重複遺跡であり、下条川によって開析された青井谷の東側丘陵に位置する。昭和45～47年にかけて調査が行なわれたが、北陸高速道小杉インターチェンジ開設に伴ない破壊された。

弥生時代後期～古墳時代初期に属する遺構は、竪穴住居址とピットがあり、なかでも最も大きな平面プランを有する第2号住居址からは、仿製小形内行花文鏡が出土し、さらに碧玉質緑色凝灰岩を原材とする管玉未成品もかなり多量に発見されている。



第2図 射水丘陵付近の弥生時代末～古墳時代初期の遺跡

5. 小杉町団山遺跡（橋本、1970）

太閤山丘陵の北端部に立地し、弥生時代後期に属する方形周溝墓群が発見されたことで著名な遺跡である。昭和44年に調査された。方形周溝墓4基、土拡4基が発見され、第2号土拡墓から、ヒスイ製曲玉、第3号土拡墓から管玉3点、鉄鏃1点が検出されている。

6. 小杉町中山南遺跡（橋本他、1971）

太閤山丘陵の端部に位置し、縄文時代中期、弥生時代終末期～古墳時代初期、奈良時代末の三期にわたる遺跡であるが、古墳時代初期が主体をなす。昭和38～43年にわたって調査が行なわれ、遺構では住居址9棟、穴7ヶ所、溝及び円形周溝等が発見された。とりわけ、本遺跡出土の古式土師器群は、北陸の古式土師器編年の上で、北陸東部の標識と言うべき基準資料となっている。

北陸の土師器編年を基礎づけた吉岡康暢氏によれば、中山南遺跡の器種構成は、甕2種、鉢2種、飴、壺7種、高坏5種、器台4種、塊、蓋3種、台付長頸壺、尖底形土器となるようである（吉岡、1967）。

以上の他に、7. 小杉町伊勢領遺跡（弥生後期？）、8. 同町山王宮古墳群近域（橋本、1974b）

9. 同町二ノ井遺跡（古墳時代初期）、などがあげられる。

墳墓址と考えられるのは、串田新遺跡（墳丘墓）、団山遺跡（方形周溝墓）、山ノ宮古墳群近域（方形周溝墓）であり、その他にも中山南遺跡の西側に所在していた二ッ山古墳などからも古式土師器が出土した（橋本他、1971）ということから、この時期に属する墳墓であった蓋然性が高い。

また、射水丘陵の東方に位置する呉羽丘陵南端（杉谷丘陵）には、古墳時代初期に属する方形周溝墓及び墳丘墓が数多く存在する（藤田、1974）。発掘調査が行なわれた杉谷A遺跡では方形周

溝墓16基、円形周溝墓1基が検出され（藤田、1975）、さらに丘陵上には該期のものと思われる墳丘墓6基が所在し、なかには杉谷4号墳のように山陰と関連性を予想させる「四隅突出形古墳」の一種と思われるものもある。また、低墳丘円形墳である杉谷3番塚は、串田新遺跡の墳墓群との形態的類似が指摘されている。

そのほかの諸遺跡は、大半が集落址であろうと思われるが、これらは串田新、上野、中山南などのように、丘陵上に立地する比較的規模が大きな集落址と、島鉢田、市ノ井、二ノ井や北方の新湊方面に所在する朴木、中曾根、沖野原などのように、沖積地に立地する諸遺跡に類別することができる。

前者に比べて、後者に属する遺跡は、本地域では本格的に調査された例がほとんどないため、沖積地に立地する集落の内容、性格について今ひとつ明瞭さに欠く。一方、丘陵上に立地する諸遺跡について、石川県の事例から、所謂「布留式土器」が北陸に普遍化する直前における共同体間の緊張の高まりに起因する政治的、社会的関係のなかで、軍事的要素も含む集落として出現するであろうことが予測されている（吉岡他、1976）。ともあれ、射水丘陵とその周辺の平野部という、一定の限られた地域内において弥生時代終末期～古墳時代初期というほぼ同一の時間帯において、丘陵上ならびに沖積地という立地傾向の異なる遺跡が営まれたことは事実である。丘陵上と沖積地の集落がいかなる性格上の差異と集落間の関係一規定を有し、丘陵上に立地する集落相互がいかなる関係一規定にあったかという、該期の集落と集落群の実体をめぐる問題は、今後に持ち越された課題であろう。そして、先述の墳墓群とこれら集落との関連性の解明により、古代射水地域における古墳発生前夜の農業共同体の実相に迫れるのではなかろうか。

次代の古墳及び古墳群は、大門町市ノ井大塚古墳（円墳）、五歩一古墳群（前方後方墳1、円墳1）、宿屋古墳（円墳）をはじめ、山王宮古墳群や現在調査が継続中の流通業務団地内に所在する12基に及ぶ円墳がある（上野、池野、1980）。これら古墳及び古墳群の在り方は、前代からの地域的特質がいかなるかたちで古墳時代に継承されていくかという、古代における本地域の動向をうかがううえで重要な問題を内包させている。一方、流通業務団地内からは、古墳時代後期（7世紀末～8世紀）～奈良時代（8世紀前半）に比定される須恵器窯跡が7基ほど確認され調査されている。かつて調査が行なわれた生源寺窯跡（塩、1964）を含めて、富山県内における有数の窯跡群であることがうかがわれ、古墳の動向とあわせて本地域の性格を考える上で重要な示標となるであろう。

奈良～平安時代では、射水丘陵地域の丘陵上とその付近の沖積平野部において遺跡数が爆発的に増加する。(註3) 主なものとして流通業務団地内に所在する集落址や、生源寺遺跡、生源寺新B遺跡があげられる。前述の弥生時代終末期～古墳時代初期とともに、奈良～平安時代は当地域における遺跡增加のひとつの画期と言えよう。

II. 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯と目的

昭和52年（1977）12月に大門町を事業主体とし、文化庁の指導、助言を受け串田新遺跡環境整備基本計画策定委員会、丹青社（株）により作成された串田新遺跡環境整備基本計画（大門町、1977）にもとづいて、昭和53年度より事実上、国指定史跡「串田新遺跡」の環境整備事業が開始された。環境整備事業の年度別の計画の概略は下記のとおりである。

〈第1次計画区域〉 国指定地

年 度	主 な 事 業 内 容	予 算 額
昭 53 年	整地工事（23,500m ² ）、盛土（1,000m ² ）	(千円) 5,000
昭 54 年	整地造成（5,131m ² ）、園路広場舗装（1,159m ² ）、水呑（2ヶ所）、四阿（1棟）、芝生植栽（4,722m ² ）	20,000
昭 55 年	整地造成（3,000m ² ）、園路広場舗装（1,600m ² ）、繩文住居址及び炉址復元、便所（1棟）、芝生植栽（400m ² ）	30,000
昭 56 年	園路広場舗装（1,200m ² ）、休憩所（1棟）、景観レリーフ、案内板、芝生植栽（6,570m ² ）、灌木植栽（5,000株）	48,300
昭 57 年	モニュメント、車止め、高木植栽（60）本	13,000

※昭和56年1月10日現在

※昭和55年度までは既整備

〈第2・3次計画区域〉 未指定地

年 度	主 な 事 業 内 容	予 算 額
昭 57 年	用地買収（14,280m ² ）	(千円) 40,000
昭 58 年	整地造成（4,800m ² ）、園路広場舗装、高灌木植栽、芝生植栽、水呑（2ヶ所）	30,000
昭 59 年	整地造成（6,200m ² ）、高灌木植栽、芝生植栽、案内板等修景施設	45,000
昭 60 年	資料館（仮称、R、1600×130千円）、駐車場1500m ² （50台分）、周辺道路整備	

この整備計画のうち、第1次計画区域については既に国指定地であり、現在、環境整備が進められている。北東に所在する櫛田神社と境域を接する第2次計画区域は未指定であるが、当初より考古学的には「串田新遺跡」の一部として把えられていた。また、第2次計画区域は環境整備計画においても重要なゾーンとしての性格を与えられていたが、遺跡の内容について不明確であったわけである。そのため、第2次計画区域の実態を学術的に明らかにするとともに、今後「串田新遺跡」の一環として保存、活用するための基礎資料を得るために町単独事業として今回の遺跡範囲確認調査にふみきったわけである。

2. 調査の経過

発掘調査の経過は下記のとおりである。

- ・ 3月15日 発掘調査のための杭打ち作業。
- ・ 3月19日～28日 第1調査区の発掘調査。
- ・ 3月31日 第1調査区の土層図作成、写真撮影。
- ・ 3月28日～4月11日 第2調査区の発掘調査。
- ・ 3月31日～4月5日 第1、2号住居址の精査。
- ・ 4月4日～11日 第3、4号住居址の精査。
- ・ 4月9日～15日 第2調査区の土層図、遺構図作成。
- ・ 4月12日～15日 第2調査区の写真撮影。
- ・ 4月15日～23日 埋め戻し作業。

その後、昭和55年4月より室内作業を行なったが、本遺跡の調査とは別箇に県道改良工事に伴なう記録保存調査（生源寺遺跡）が実施されたので、5月以降は雨天で発掘調査ができない日に關してのみ記名、接合、土器復元の作業を行なった。出土遺物の実測及び報告書作成は、実質的に12月以降に持ちこされることになった。

III. 調査区とその概要

串田新遺跡は、前述のように大沢山と呼ばれる独立丘陵上に位置している。大沢山の最高位は、丘陵南西部の標高46mの地点であり、この付近に繩文時代中期に属する集落の主体部が立地する。大沢山は、その地点より北東部に向けて緩やかな傾斜面をなして広がり、町道宮新田、松原線が貫通している谷状部をはさんで、ややレベルの高い櫛田神社社叢へと続いている。

今回の範囲確認調査の対象範囲は、国指地外の北東地区であるが、町道宮新田、松原線を境として南西部を第1調査区、北東部を第2調査区と呼ぶことにする（付図参照）。

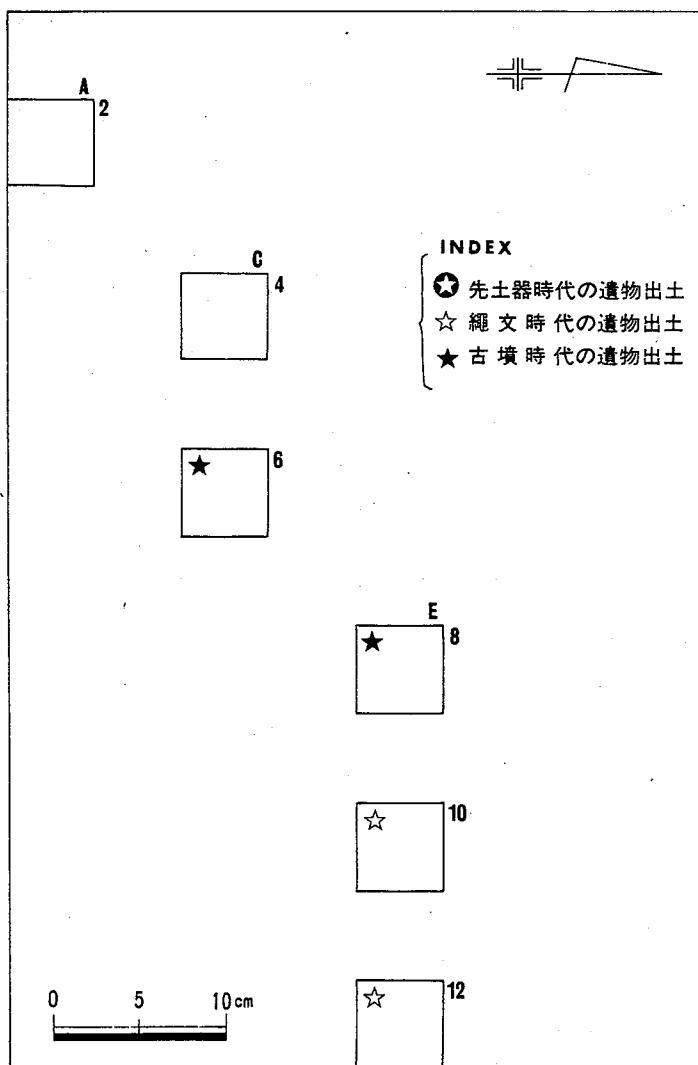
第1調査区は、大沢山へ登る小径より南側は、土砂の採取によって削り取られ、崖状になっている。そのため、この部分は調査が不可能であるので、今回は現存している北側部を重点的に調査した。出土した遺物の量は、あまり多くなくE10、E12より繩文土器の細片及びフレイク等が、また、C6、E8よりは古式土師器片が若干検出されたに留まる。しかし、繩文土器細片が検出されたE10及びE12付近における遺存状況は、プライマリーであるため遺構等が存在する

可能性は高い。

第2調査区は、A8より先土器時代の石刃が検出された。層位は、ローム層の上面である。A12～15及びE12からは、古墳時代初期に属する計5基の竪穴住居址が検出された。

出土遺物の大半は古式土師器であり住居址覆土中からの出土が極めて多い。また、A8、E8、H8より古式土師器の細片が出土しているが、遺構は検出できなかった。現在、国指定地内に所在する3基の墳墓、とゆるやかな谷状部を挟んで隣接する地点に古墳時代初期に属する集落が発見されたことは、ある限られた空間内に墳墓と生活跡が一体となって存在する遺跡として極めて興味深い事実を示唆するものであると言える。

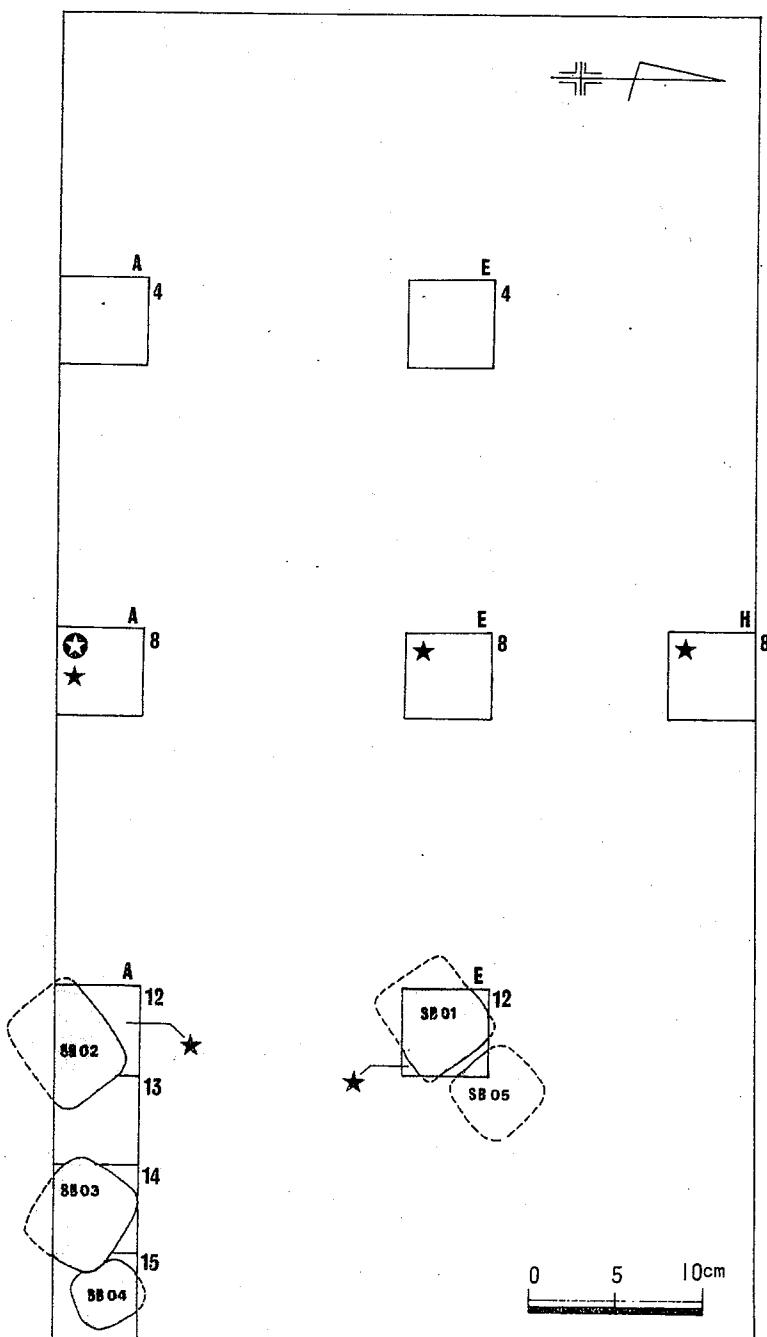
第1調査区の層序は、第1層—耕作土、第2層—黒褐色土層、第3層—ローム粒を含む茶褐色土層、第4層—



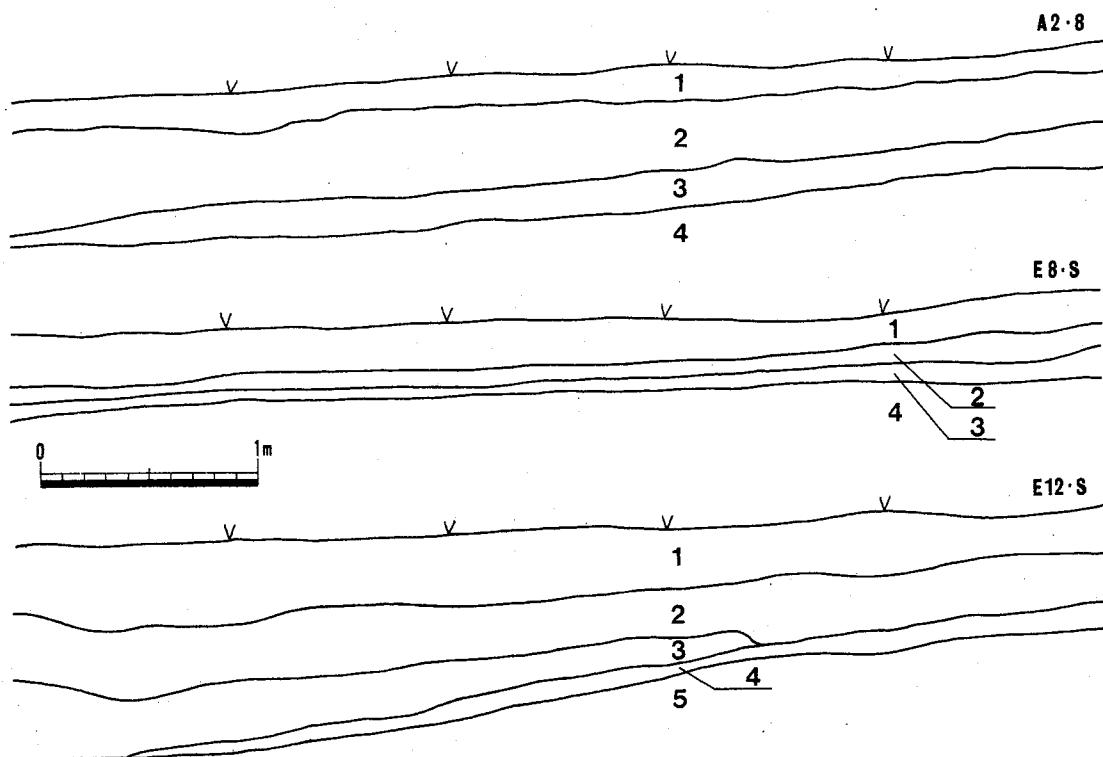
第3図 第1調査区概念図

一ム層（地山）の順で堆積している。耕作土は、平均15cmぐらいの厚さであるが、黒褐色土層はA 2では35~40cm、E 8では10cm前後、茶褐色土層はA 2では10~15cm、E 8では5cm前後と言うように、地山までの深さは地点によってかなりの相違が認められるようである。また、E 12においては第2層の下に黒色粘質土層（2層）の堆積がみられ、第3層が不明瞭である。

第2調査区では、耕土と黒褐色土層の区別がほとんど不可能であるが、その下に茶褐色土層（ローム粒混入）、ローム層と堆積しているのは、第1調査区と基本的にかわらない。第1層（耕土+黒褐色土層）が20~30cmで、第2層が10~20cm前後の状態が第2調査区では一般的である。



第4図 第2調査区概念図



(A2, E8) 1.耕土(黒褐色土)

2.黒褐色土層

3.茶褐色土層(ローム粒含む)

4.地山(ローム)

(E12) 1.耕土(黒褐色土)

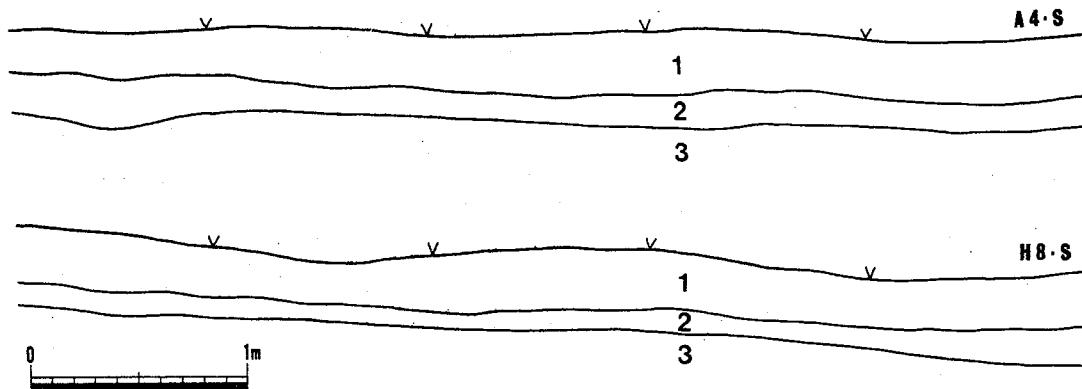
2.黒褐色土層

3.黒褐色粘質土層

4.茶褐色土層(ローム粒含む)

5.地山(ローム)

第5図 第1調査区土層図(南壁)



第6図 第2調査区土層図(南壁)

1.耕土(黒褐色土層)

2.茶褐色土層

3.地山(ローム)

IV. 発見された遺構と遺物

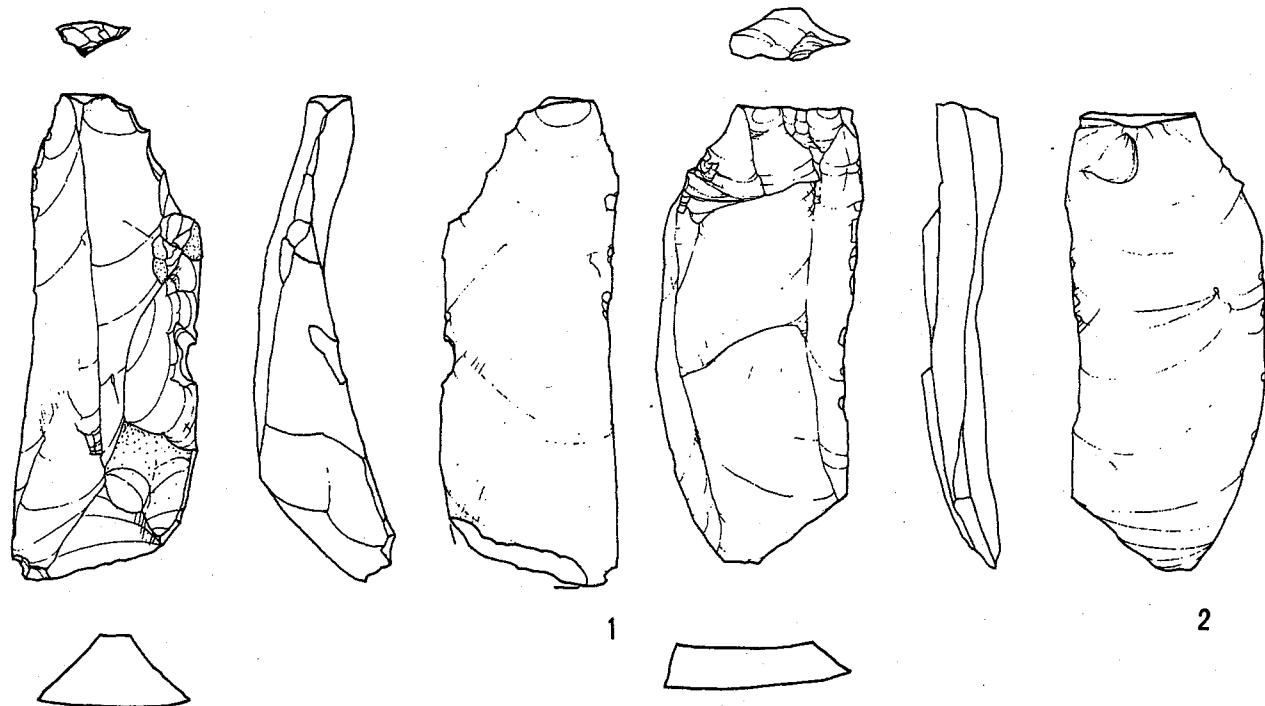
1. 先土器時代の遺物

大門町内からはこれまでに生源寺新遺跡、串田新遺跡の2遺跡から先土器時代の遺物が発見されている。いずれも石刃の単独出土であり、ユニットといった石器群としての概念で把えることのできる石器の検出例はない。

2は今回の調査で出土したもので、頁岩製の石刃である。今回の調査では出土した石器はこの一点のみである。長さ1.8cm、幅3.3cm、厚さ0.7cmを測る。背面の打撃方向は、全く腹面と同一方向であり、頭部調整が認められる。打面は2枚の剥離面からなる調整打面であるが、いずれも打撃痕を有しておらず、打面調整→頭部調整→石刃剥離の工程で石刃の製作が行なわれたことがわかる。石刃から判断すれば、单設打面の石核から剥離されたと言えよう。一側辺の背腹両面には、細かな刃こぼれと呼んでいいような小剥離痕がみられる。使用痕と考えていいだろう。

1は、生源寺新遺跡より採集されたもので、既に『富山県史 考古篇』に紹介されている（西井、1972）。長さ8.2cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測る。背面剥離の打撃方向は、腹面の剥離方向に対し同一方向、逆方向、横方向で一定していない。これは、石核が両設打面であること、石核調整が行なわれたことを示している。打面は、細かな剥離痕によって構成されている。剥離面の切り合い関係から、石刃剥離→打面調整→石刃剥離の順序で石刃製作を行なっていることがわかる。2と比較すれば、頭部調整が欠落している。

富山県で石刃技法が卓越する時期は、富山県第III期である（橋本、1976）。この時期の石器群は、頁岩を多用するのが常態であり、これら2点の石器も富山県第III期に属するものと考えられる。



第7図 先土器時代の石器(1.生源寺新.2.串田新) (2/3)

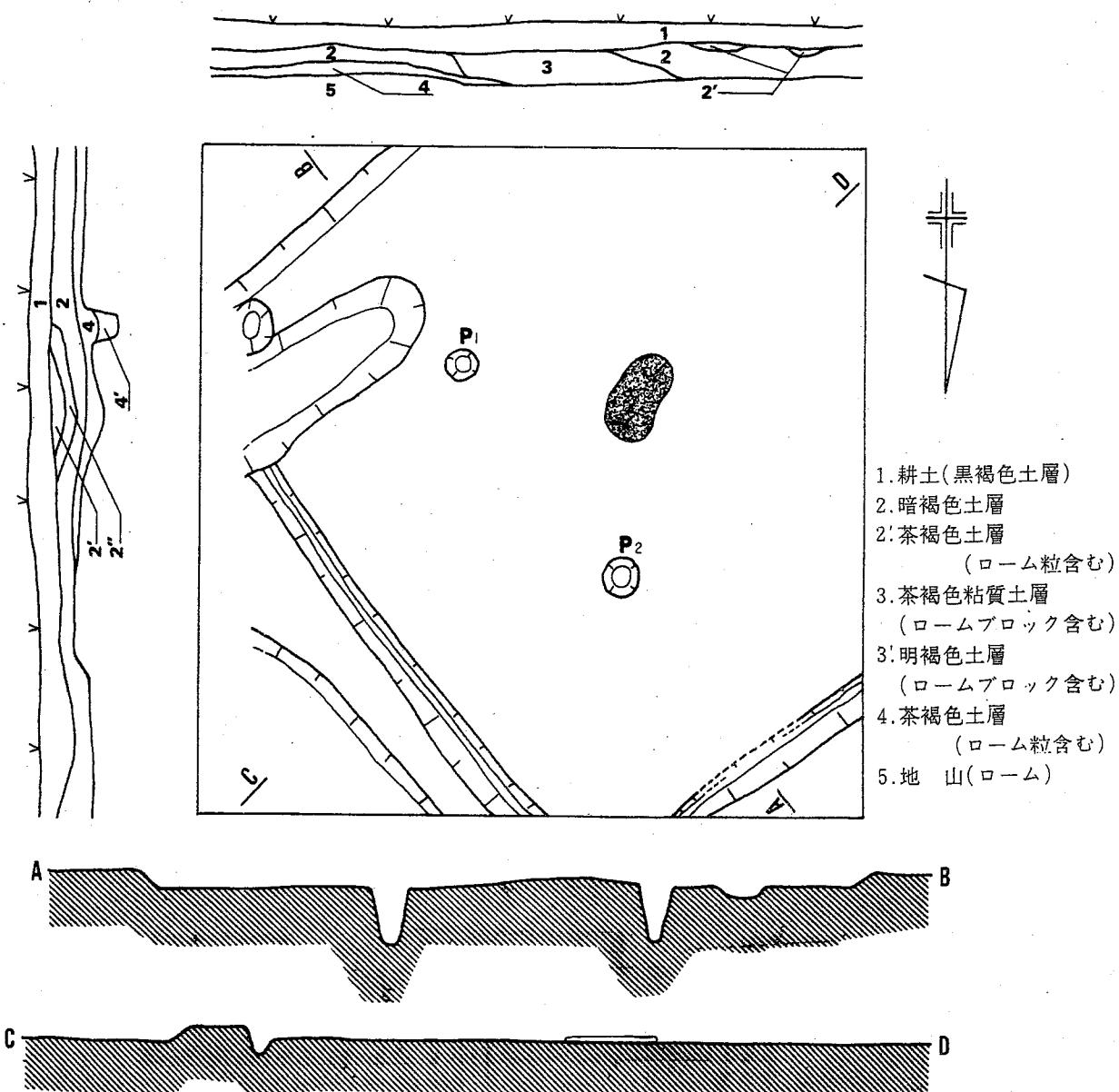
ところで、射水丘陵から呉羽丘陵にかけては、先土器時代の石器の出土例は1点のみ、もしくは、数点の単発的なものが多い。この地域における丘陵地の利用の様態を示唆していると思われる。

2. 古墳時代初期の遺構

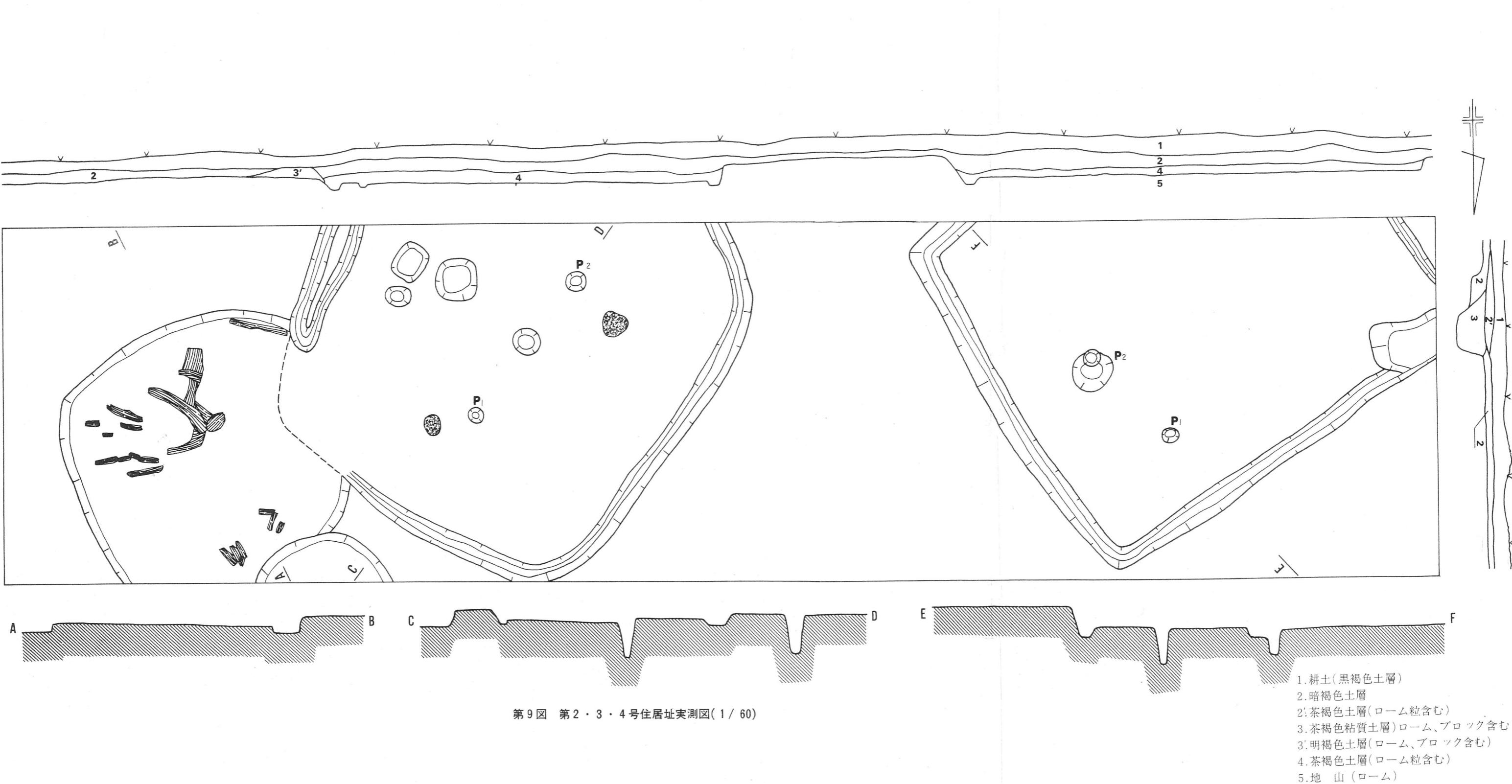
(1) 第1号住居址

ほぼ方形を呈する竪穴住居址で、1辺約5.0m程度と推定できる。壁高は、約12~14cmを測り、周構は幅15~20cm、深さは床面から2~3cmを測る。焼土は、住居址中央に比較的まとまっており、これを炉址と考えることができる。柱穴は2本検出しているが、P₁は直径20~23cm、深さ40cm、P₂は直径28~30cm、深さ45cmを測る。P₁、P₂の柱穴間の距離は2mであり、南西側へ住居址が広がるものと思われるが、東側が後世の所産と考えられる不定形な溝によって一角が壊されている。

遺物は、古式土師器であるが、8割以上が覆土から出土しており、床面付近から検出されたも



第8図 第1・5号住居址実測図(1 / 60)



第9図 第2・3・4号住居址実測図(1/60)

のは、1～3、5、17、27、29（第10～11図参照）である。

また、北東側に隣接して竪穴住居址が1棟検出された。壁高約15cmを測るが、本住居址に伴う遺物は古式土師器の細片のみであった。

（2）第2号住居址

方形を呈する竪穴住居址で、推定5.5×6.5mの規模をもつようである。壁高は30cm、周溝は幅35～40cm、床からの深さ10～15cmを測る。焼土は、床面付近で若干観察できたが、どれも極めて薄いものであり、明らかに炉址と考えられるものは検出できなかった。柱穴は2本のみ検出している。 P_1 は直径20cm、深さ50cm、 P_2 は直径25～28cm、深さ40cmを測る。 P_1 、 P_2 の柱穴間の距離は1.6mである。その他の柱穴は、かなり丹念に精査したが、今回の調査では検出できなかった。本住居址の壁高が高く、周溝がかなり明確であることは、他の住居址に比べて本住居址の特徴のひとつと言える。

遺物は、覆土中からかなり出土しているが、床面からも47、53～56（第13図参照）が検出されており、本住居址の使用及び廃絶時期を考えるうえでの示準になる。

（3）第3号住居址

隅丸方形を呈する竪穴住居址で推定5.5×6.0mの規模をもつ。壁高12cm、周溝は幅22～25cm、床面からの深さ6～7cmを測る。焼土は、住居址の西部側でややまとまって検出でき、これを炉址と考えることができよう。柱穴は2本検出されており、 P_1 は直径約20cm、深さ55cm、 P_2 は直径約25cm、深さ55cmを測り、柱穴間の距離は2.3mである。

(註4)

本住居址は、いわゆる「2本支柱Y型」（橋本、1977）の住居型であり、その特異性が注意されよう。柱穴以外に、やや浅いピットが4基検出されているが性格、用途は不明である。だが、ピットのひとつからは植物種子を含む炭化物が検出されており、貯蔵用施設の可能性がある。また、4号住居址に接する東側部では、張本を施して住居を構築しており、3号→4号という新旧関係が考えられる。

なお、1号、2号、3号の各住居址は、その主軸方向をほぼ同一にしていることに注意したい。遺物は、古式土師器であるが、大半が覆土中からの出土であり、床面からの出土は70～80（第14～15図参照）などで極めて僅少であった。管玉等の原材料に用いたと思われる碧玉質緑色凝灰岩の石片も数片検出できた。

（4）第4号住居址

円形に近い隅丸方形を呈するもので、約3.5×3.5mの規模で、壁高20～25cmを測り、周溝は認められない。小規模な竪穴である。倒壊した際のものと思われる炭化材が床面一帯に散乱しており、柱穴等も今回の調査では炭化材を現状のまま埋めもどしたので、確認することができなかった。本住居址は、他の住居址に対して規模が極めて小さく、主軸方向も異なっており、特殊な機能をもつ施設のようにも考えられる。

遺物は、覆土中の土器以外に、床面から88～90、92の甕や99、102～103（第16～17図参照）な

どが検出できた。なお、本住居址に接して、北側に円形の土塹が一基発見された。

3. 古墳時代初期の遺物

遺物は、ほとんど古式土師器であり、住居址の覆土及び床面から出土している。出土した古式土師器には、甕、壺、鉢、高坏、器台、蓋などひととおりの器種はそろっているが、各住居址において器種構成にかなりのばらつきが認められる。出土した土器の総量もあまり多量ではないので、ここでは若干量的に多く見られた甕、壺、高坏に関してのみ、大まかではあるが、下記のような分類を提示しておく。

・甕 A₁—複合口縁 無文のもの

A₂—複合口縁 平行沈線を有するもの

B₁—くの字口縁 口唇部に1cm前後の面取りを有するもの

B₂—くの字口縁 ほとんど面取りをもたないもの

・壺 A —複合口縁の壺

B —長頸壺

C —台付長頸壺

D —小形壺

・高坏 A —坏部底部側が小さく、口縁部が大きくラッパ状に開くもの

B —坏部底部側が大きく、口縁部が短くゆるく開くもの

C —坏部底部側が大きく、丸い形を呈するもの

a —有段の脚部

b —無段でラッパ状になる脚部

(1) 第1号住居址出土の土器

甕形土器において、B類が他の住居址に比べ若干多い傾向にある。B₁類(6~10)は、頸部の屈曲の若干大きなもの(8・9)と、屈曲のゆるやかなもの(6、7、10)があり、なかには6~9のように縦方向の刷毛調整を施すものがある。内面頸部以外は、ヘラ削り(9、10)、刷毛(8、11)などで調整を施すものが多い。B₂類(1~5、11)は、B₁類にみられるような口唇部の面取りはないが、0.5cm以内の面取りを施したものが多くある。2、5のように頸部以下の外面を縦方向の刷毛調整を行い、刷毛目を横ナデで消して口頸部に明瞭な無文帯をつくっているものも目立つ存在である。また、1と10はいずれも受口的の口縁を呈するものである。

複合口縁を呈する甕A類は、本住居址ではあまり目立たぬものであり、特に平行沈線を有するA類で図化できるものは僅少であった。複合口縁部が無文であるA₁類は、口縁部の形状によりいくつかのバラエティーが指摘できる。a、口縁部先端がほぼ直立気味に立ちあがるもの(13、19)b、口縁部先端が外反気味にひらくもの(12、14~16)、c、口縁部がほとんど肥厚せず外反す

るもの（17、18）などであり、a、bは頸部の屈曲が強く、内面頸部以下のヘラ削りが卓越するのに対し、cでは頸部の屈曲はあまり明瞭ではなく、ヘラ削りはほとんどみられず、A₁類のなかでも特異な存在と言えよう。

壺形土器は、複合口縁の頸部を有する壺（21）や、口縁部先端で面取りが行われる長頸壺（22）などである。また、小形丸底壺の祖型を思わせる特異な形状を有する小形壺（23）の存在も注意すべきであろう。

高坏では、A類（27）とB類（26、28～29）とがある。A類は、B類に対し後出的なものと考えられるが、量的には少なかった。29は器形全体がわかるものであるが、26と同じように坏部の内外面と脚部外面を刷毛で仕上げている特異な高坏である。

本住居址の土器は、甕形土器において他の住居址に比べてB類が卓越していること、長頸壺がみられること、高坏においてB類が多いことなどから、本遺跡の土器群中でも古い様相を呈すると思われる。

（2）第2号住居址出土の土器

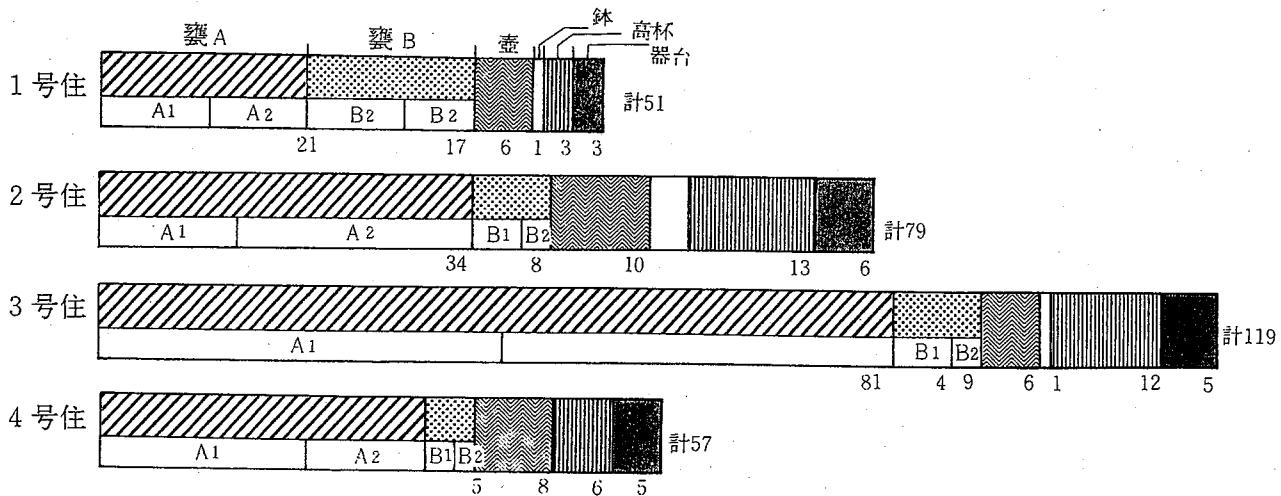
甕形土器のなかで、複合口縁を有するA類では、口縁部を無文にするA₁類が14個体、平行沈線及び擬凹線を有するA₂類が24個体で、A₂類が卓越している。B類は、8個体と数少ない。A類では、口縁部の形状と頸部での屈曲の度合によりバラエティーが認められる。a、口縁部が直立気味に立ちあがるもの（32、34、44）、b、口縁部がゆるやかに外反するもの（31、33、42～43）、c、口縁部先端が鋭く外反するもの（30、39～40）である。32は、内外面を刷毛調整を施し、形状とも特異なものである。aに属する34や44などは甕A類のなかでも若干古い要素を有するものではなかろうか。bは、総じて頸部の屈曲部がゆるやかであり、口縁部も比較的、肥厚気味である。cは、2号住居址ではそれ程明瞭ではないが、ティピカルな「月影式」の甕に近い形状を呈する。

また、本住居址からは複合口縁を有する器台（48、49）や、北陸東北部の特徴的な器種と言われる台付長頸壺とそれに伴なう蓋（50、51）なども検出され、本住居址の土器組成を豊富にしている。他の住居址に対して鉢形土器も多く、浅鉢形の形状のもの（55、56）と複合口縁的な形状のもの（57、60）とがある。浅鉢形の形状のものは、「月影式」に特徴的な鉢と言われており、後者はやや前出的な要素と思われる。57などは、小形丸底壺の一種と考えてもよいのではなかろうか。

第2号住居址より検出された土器群は、従来の土師第1様式と考えられる。現在、土師第1様式は細分される傾向にあるが、そのなかで新しい要素（塙崎III式）と思われるものが本住居址の土器群中、若干みうけられるものの量的にはさほど多くはない。ここでは、土師第1様式の範疇を逸脱するものではないことを指摘するに留める。

（3）第3号住居址出土の遺物

本住居址においては、甕A類が圧倒的に多く、甕以外の器種については、ひととおりそろって



第1表 各住居址出土土器の器種構成（甕、壺は口縁部個体数による）

いるものの、全体に貧弱である。このような器種構成における偏在性は、大半の土器の出土が、
(註5)〈廃棄〉された状態であることにも一因あるのではなかろうか。

甕A類は、前述したように口縁部の形状や頸部での屈曲のしかたにより、いくつかの種に分けることができる。a、口縁部が直立気味に立ちあがるもの(64、72、73、77)。b、口縁部がゆるく外反し、概して頸部の屈曲がゆるやかなもの(61、63、66)。c、口縁部が強く外反し、頸部の屈曲がゆるやかなもの(62、65、67、75、79)。d、口縁部先端が鋭く外反し、概して頸部の屈曲が強いもの(68、74、76、78)。e、口縁部が内反するもの(70)である。本住居址では、c、dが最も多く、それに次いでaが多くみられた。dは、ティピカルな「月影式」の甕の形状に近いものであり、胴部の最大径が上半部にくるものであり、本土器群中でも新しい様相のものであろう。

なかでも、器形全体がうかがわれる78は、「月影式」の甕の典型的な形状と調整を示している。また、口縁部外面の仕上げが特異な79は、内面頸部以下に明瞭なヘラ削りを施し、形状等からはやや新しい様相がうかがわれる。cは、口径が胴径をしのぐものが、若干見うけられ、bでは、広口壺と思われる64や、特異な形状を呈し、内面頸部以下に刷毛調整がみられる73などもあり一定しない。これら甕A類は、形状等において様々なバラエティーがあり規範的に把えられないものの、内面頸部以下をヘラ削りで調整する点で一定程度の共通性が指摘できよう。

また、高坏においては、84のように坏部が極めて小さく脚部がラッパ状に広がるもののがみられ、高坏のなかでは新しい要素と言えよう。甕、高坏等におけるこれらの特性から、本住居址の土器群は、他の住居址に比べて土師第1様式のなかでも新しい様相（塙崎III式）が多く抽出できるようであることを指摘しておく。

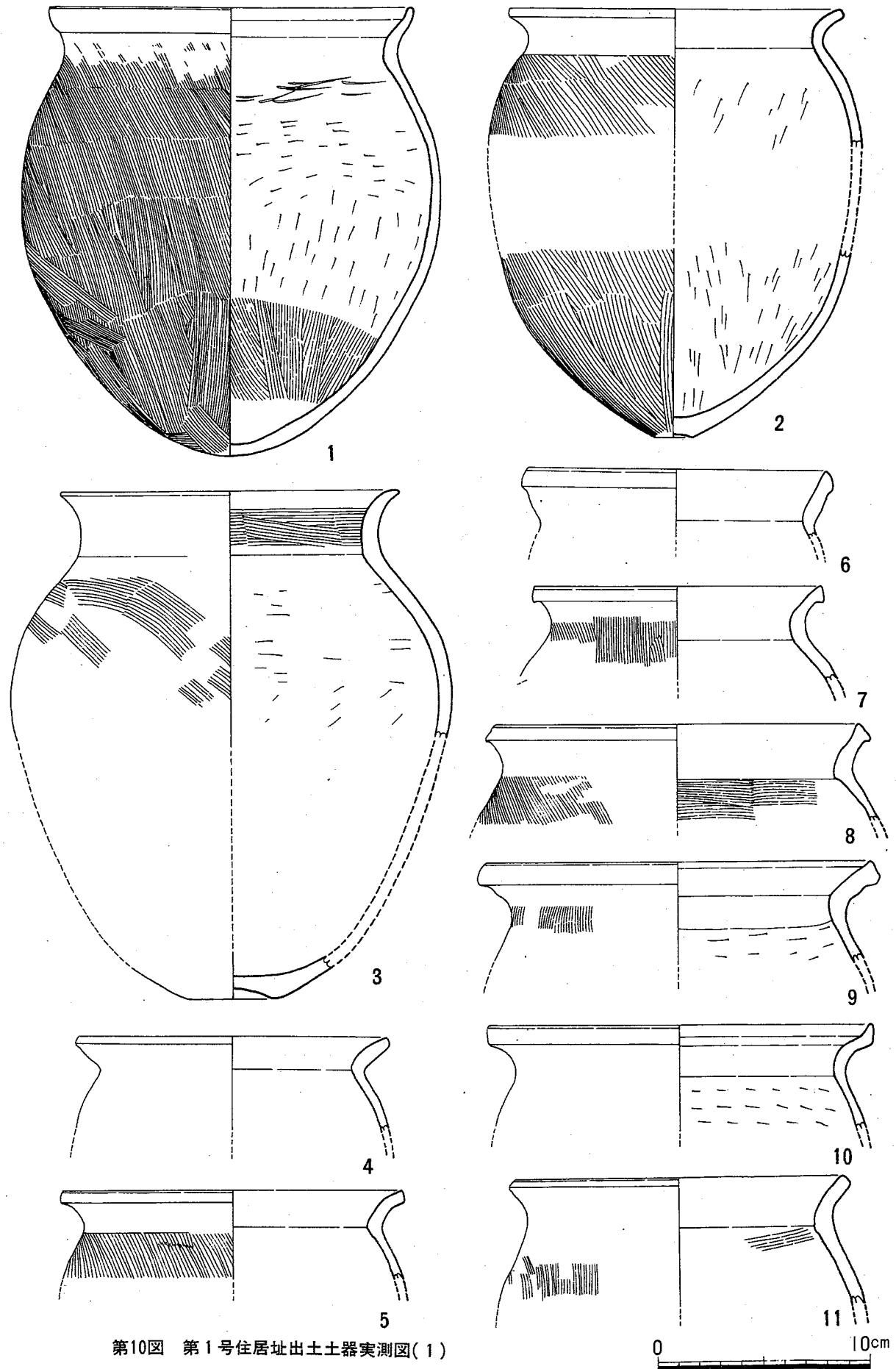
(4) 第4号住居址出土の遺物

本住居址は面積が小さいので、土器個体数も少ない。甕A類は、87を除いて口縁部内外とも横ナデで無文に仕上げるA1類である。他の住居址に比べて、やや多くみられた、くの字口縁を呈する甕B類(90、93、94)は、口唇部に若干の面取りが行われているけれども、1号住居址などに

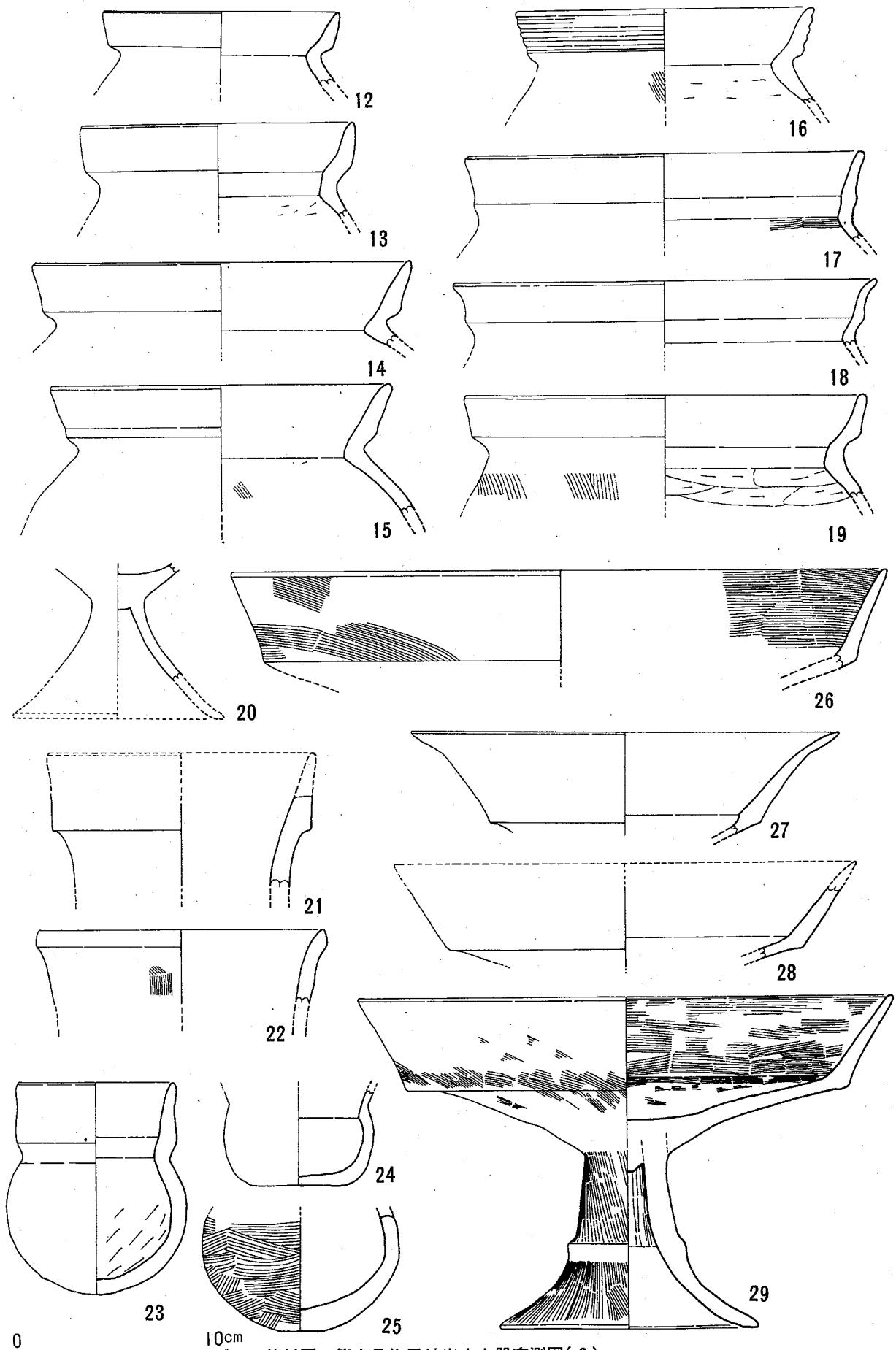
みられる面取りを約1cmぐらいで肥厚させるグループとは明らかに異なっている。これらは、甕B₂類として理解しておく方が、ここでの大まかの分類のなかでは妥当であると思われる。93、94のように器内面を横方向の刷毛で仕上げる手法も、内面頸部以下にヘラ削りの卓越する第1号住居址の甕B類とは異なっている。

また、95~97、99~100のように複合口縁を呈し、頸部が若干長くなる壺類があることも本住居址の土器群で特徴的なもののひとつである。これらはほとんどがナデ調整とヘラ磨きを併用しており、96~97、99のように丹と思われる赤色顔料を塗彩したものもみられる。95は、長頸壺の頸部であるが、この器種のなかではやや後出的なものであろう。高壺は、壺部の底部側が小さく、口縁部がラッパ状に大きく開く102の類と、壺部底部側がやや大きく丸い形状を呈し、全体に小ぶりな104の類が認められる。103は、台部としては大きなものであり、粗大な台付壺（甕？）の台部であろう。

以上のように、4号住居址の土器群は若干古い要素が認められるものの、土師第1様式の古いグループ（塚崎II式）を中心とするものと考えられる。

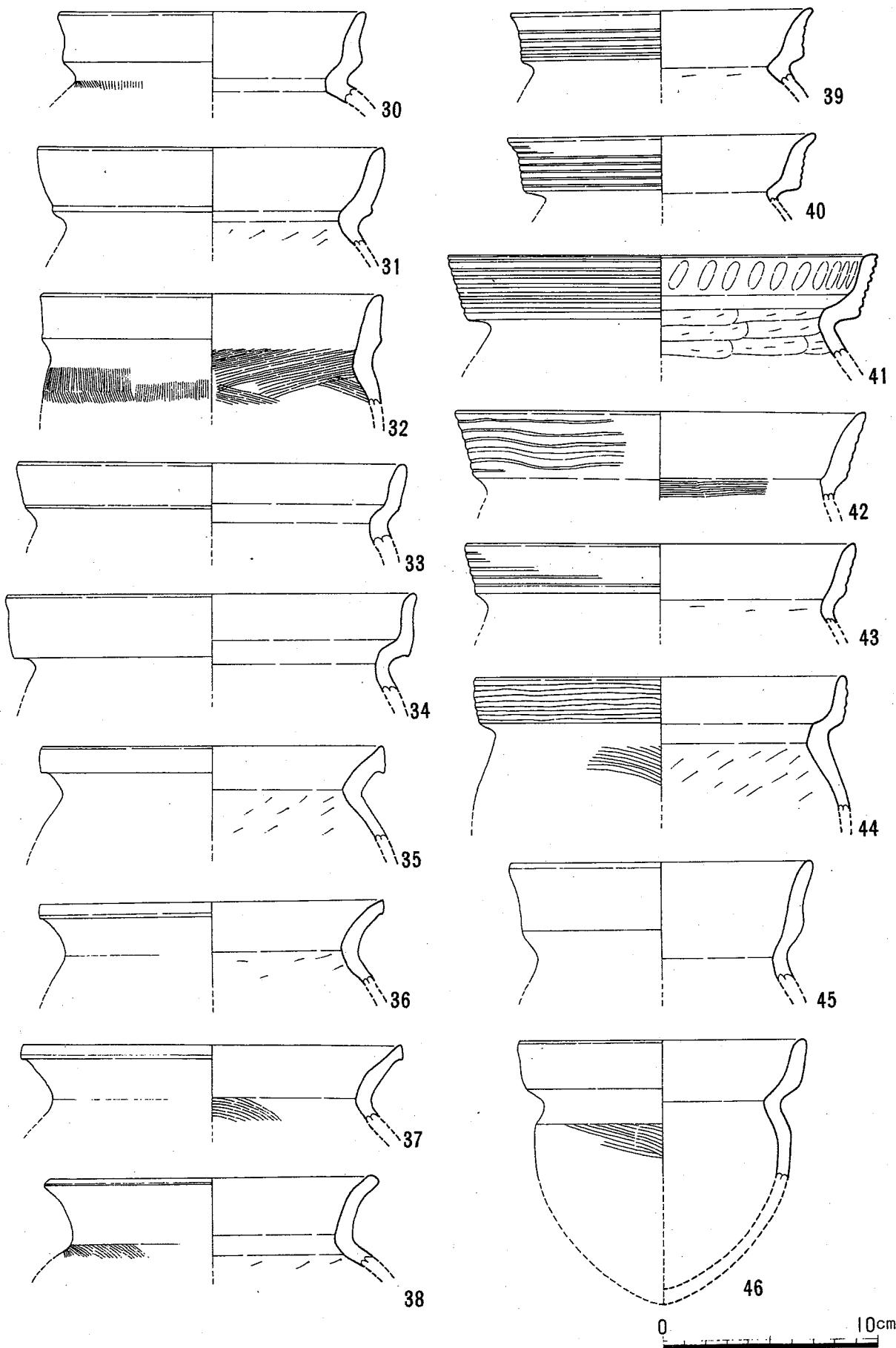


第10図 第1号住居址出土土器実測図(1)

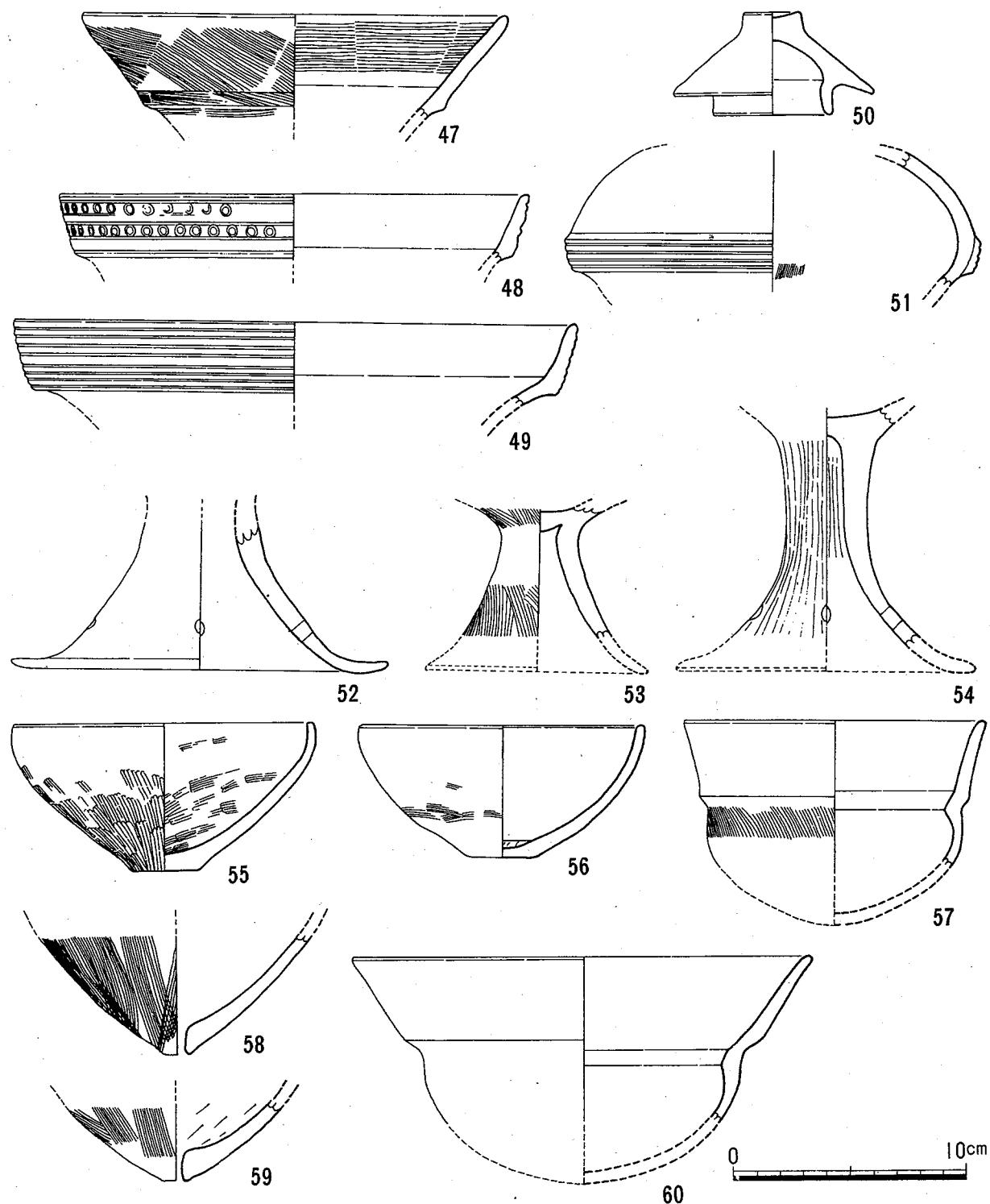


0 10cm

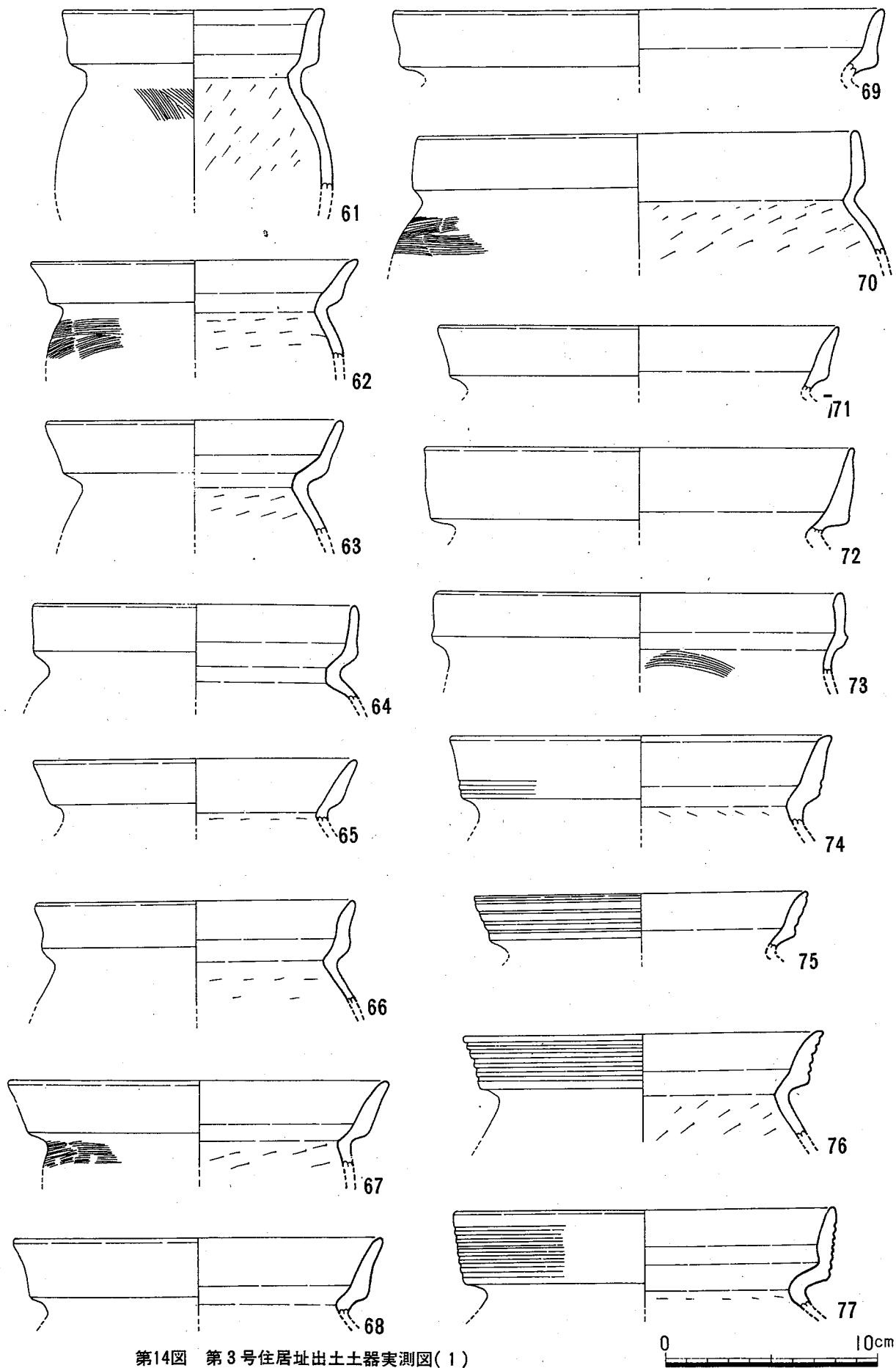
第11図 第1号住居址出土土器実測図(2)



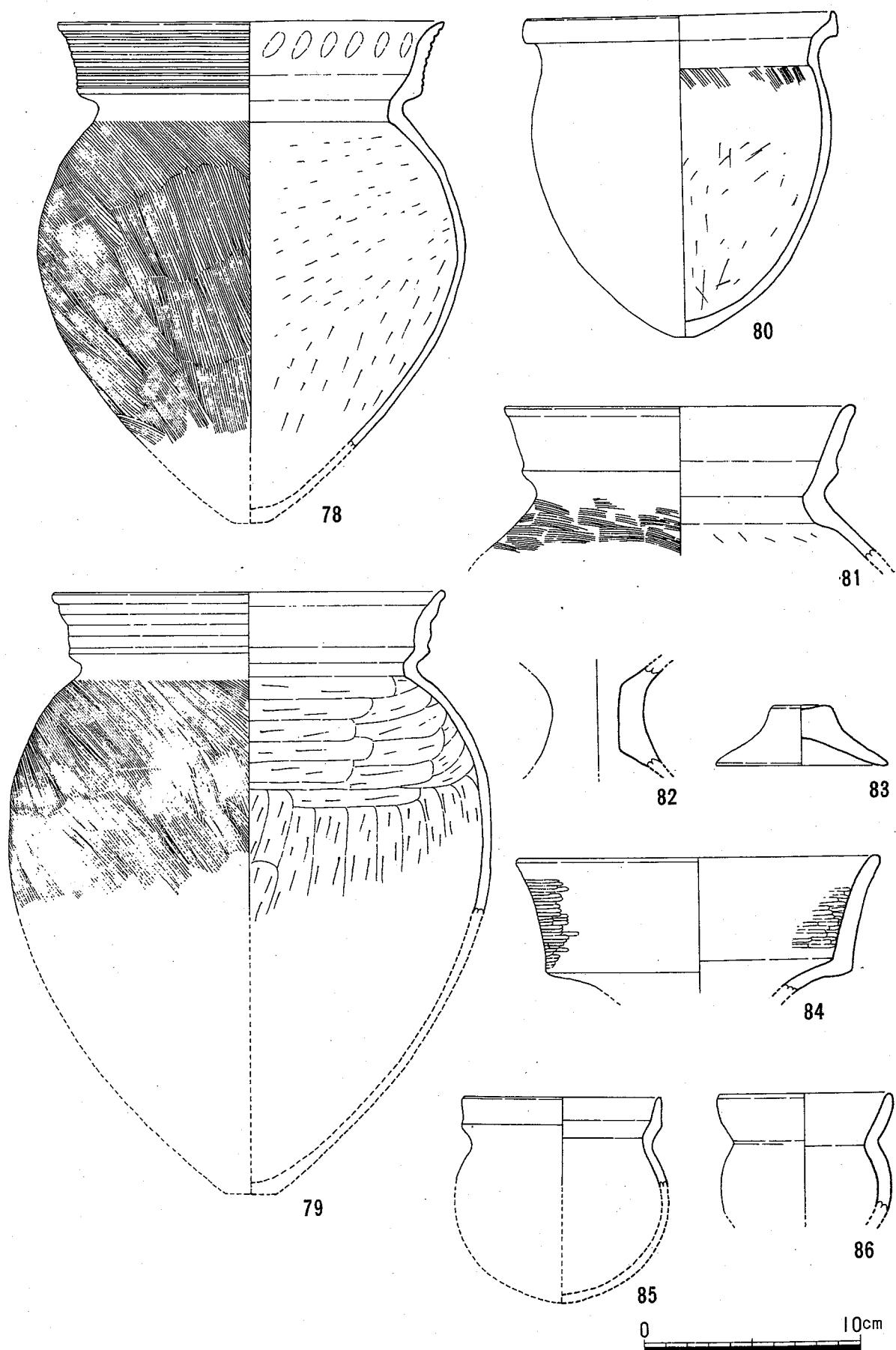
第12図 第2号住居址出土土器実測図(1)



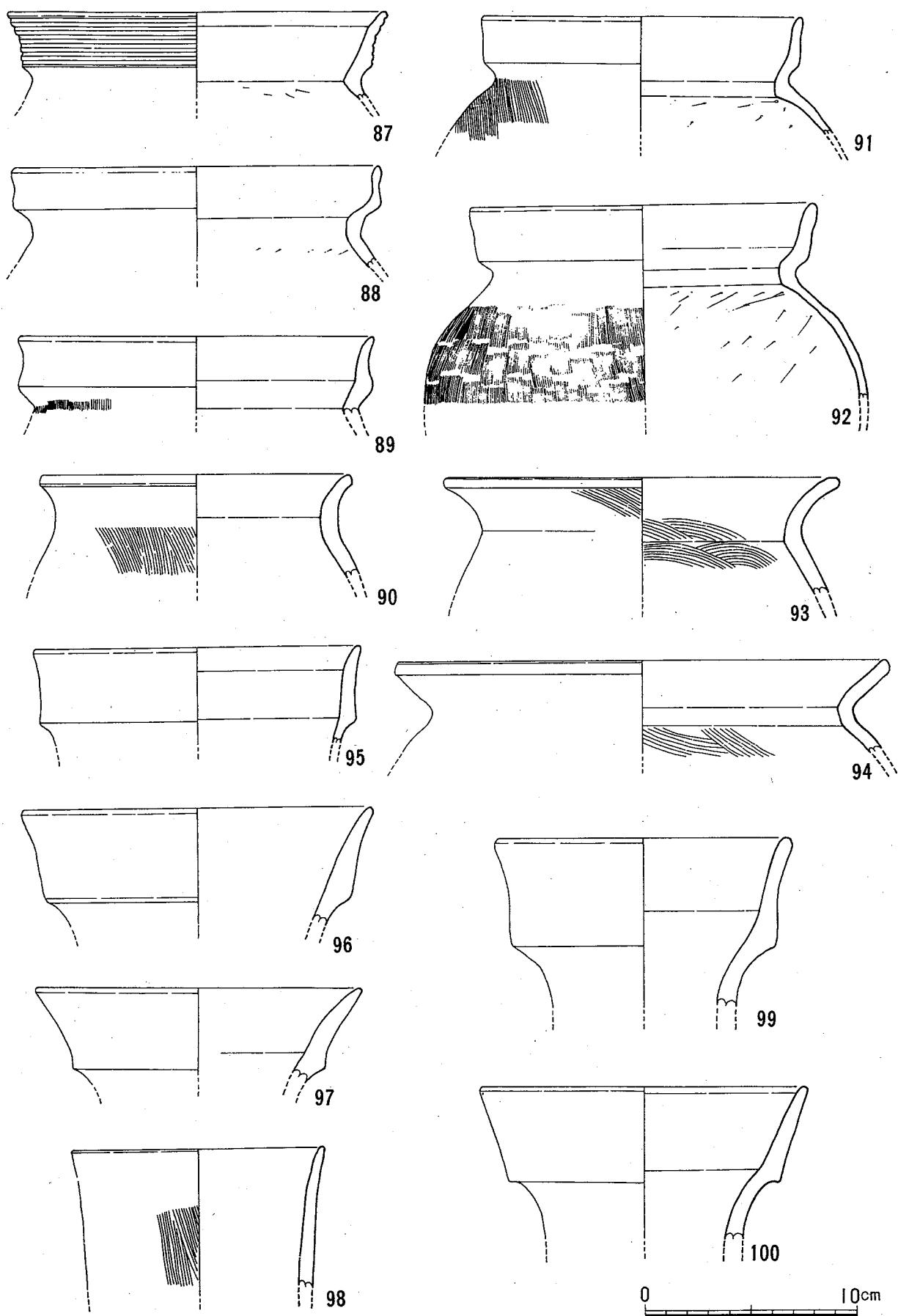
第13図 第2号住居址出土土器実測図(2)



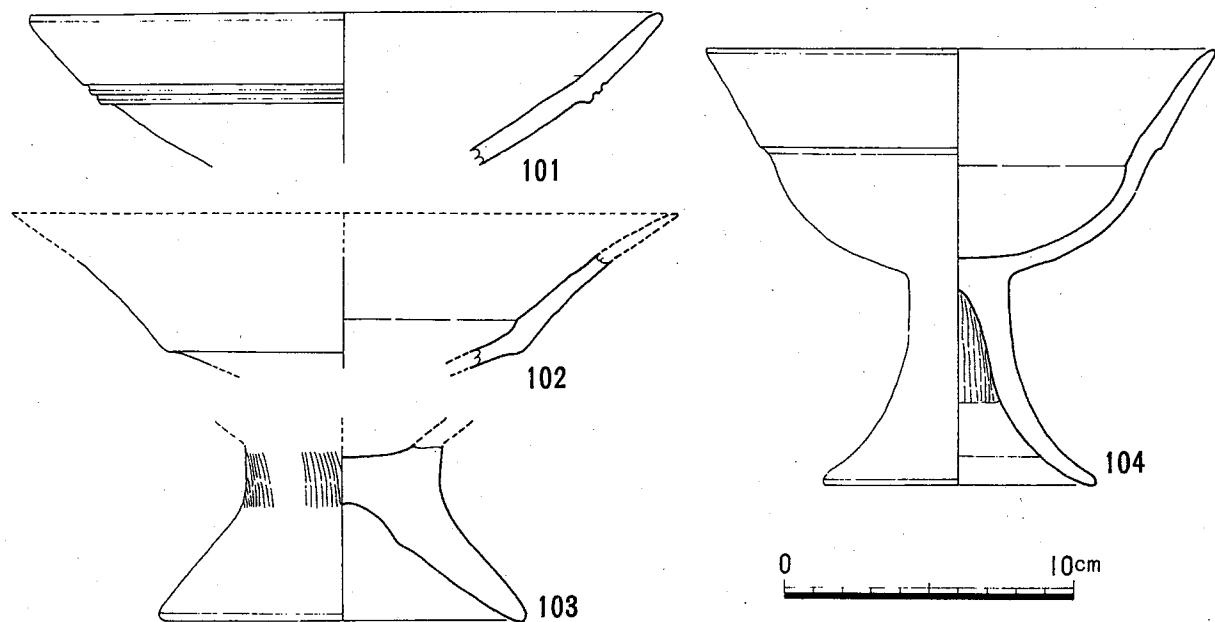
第14図 第3号住居址出土土器実測図(1)



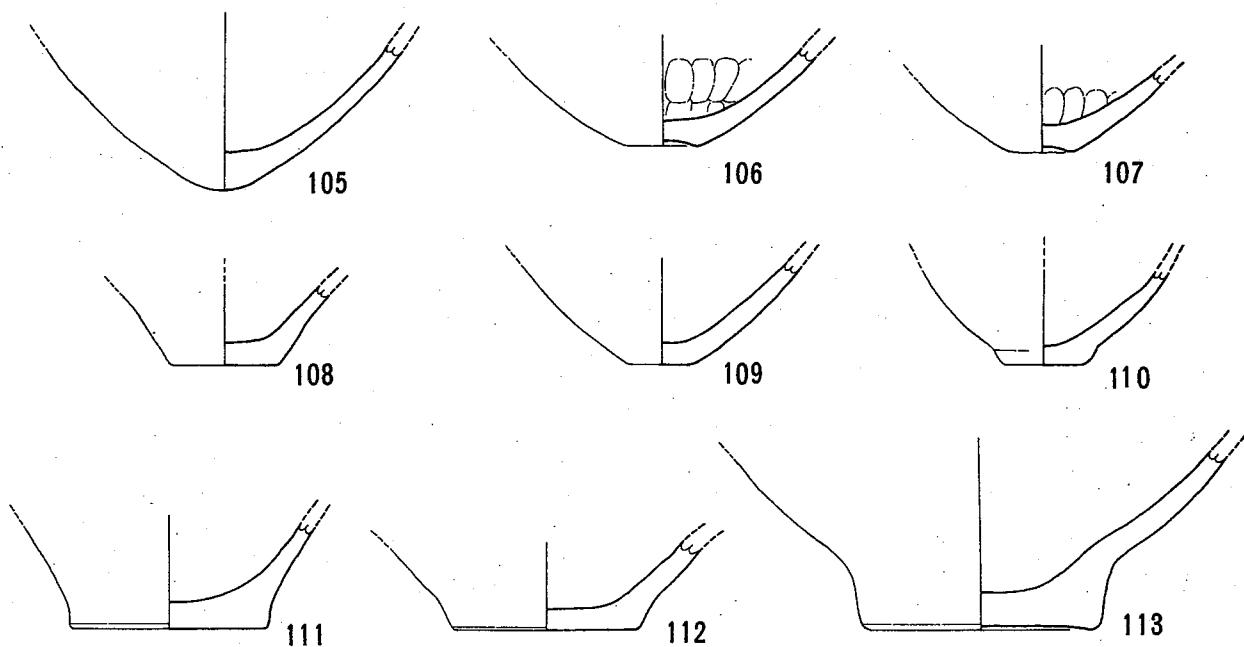
第15図 第3号住居址実測図(2)



第16図 第4号住居址出土土器実測図(1)



第17図 第4号住居址出土土器実測図(2)



第18図 底部実測図

出土土器観察表

(1)

※胎土・焼成とも良好なものについては特に記していない 第2表

	番号	器種	法量(cm)			色調	調整・その他(胎土・焼成)
			口径	器高	胴径		
第 1 号 住 居 址	1	甕B2	17.1	20.5	19.6	淡灰色	外面は口縁部を横ナデ、胴部を縦方向の刷毛。 内面は頸部以下をヘラ削り、底部付近を刷毛で調整。
	2	甕B2	15.6	19.7	17.6?	淡褐色	胎土に荒い砂粒含む。口縁部内外面を横ナデ、外面を斜方向の刷毛、内面をヘラ削りで調整。
	3	甕B2	15.9	23.5?	20.1	淡褐色	焼成はやや不良。口縁部内面に横方向の刷毛、胴部外側を刷毛。内面をヘラ削りで調整。擬口縁の可能性あり。
	4	甕B2	14.5			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成はやや不良。
	5	甕B2	16.0			灰褐色	口縁部内外面とも刷毛を横ナデで消して調整。
	6	甕B1	14.0			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成はやや不良。
	7	甕B1	13.5			暗褐色	胎土に荒い砂粒含む。
	8	甕B1	16.8			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成はやや不良。内面頸部以下を横方向の刷毛で調整。
	9	甕B1	18.0			淡褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	10	甕B1	18.0			淡褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。受口状口縁を呈す。
	11	甕B2	15.4			淡褐色	内面頸部以下の一部に刷毛調整。
	12	中型壺 (壺A)	11.2			淡褐色	内外面とも赤色顔料塗布。
	13	甕A1	12.8			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	14	甕A1	17.7			淡褐色	胎土に微細な砂粒を多量に含む。
	15	甕A1	16.0			明褐色	胎土に荒い砂粒含み、胴部外面は刷毛をナデで消して調整。
	16	甕A2	14.0			淡褐色	胎土に荒い砂粒含み、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	17	甕A1	18.8			淡褐色	内面頸部以下は横方向の刷毛調整。
	18	甕A1	20.0			暗褐色	口縁部外側に炭化物付着。
	19	甕A1	18.8			淡褐色	口縁部外側に横ナデ、内面頸部以外はヘラ削りで調整。 炭化物付着。
	20	高 坯				淡褐色	
	21	壺				赤褐色	赤色顔料塗布。
	22	壺	13.4			暗褐色	頸部外面の一部に刷毛。
	23	小型壺 (壺)	7.5	9.8	8.6	暗褐色	内外面とも赤色顔料塗布。
	24	鉢(碗)	7.2?	4.9?	7.0	淡褐色	
	25	鉢(碗)	8.9	5.4	9.4	暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、外面は刷毛調整。内側の底部付近に指頭圧痕。
	26	高 坯	30.9			暗褐色	内外面を横方向の刷毛で調整。
	27	高 坯	20.2			淡褐色	ヘラ磨きで調整。

	番号	器種	法量(cm)			色調	調整・その他(胎土・焼成)
			口径	器高	胴径		
	28	高 坯	21.7			淡褐色	内外面とも赤色顔料塗布。
	29	高 坯	25.2	15.3		淡褐色	胎土に荒い砂粒含み、内外面ともに刷毛調整。
第 2 号	30	甕A 1	14.2			暗褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、焼成は不良。胴部外面は刷毛調整。
	31	甕A 1	16.0			明褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	32	甕A 1	15.9			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、内外面を刷毛で調整。
	33	甕A 1	18.0			赤褐色	胎土に荒い砂粒含み、内外面をナデで調整。
	34	甕A 1	18.9			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、内外面をナデで調整。
	35	甕B 1	15.8			赤褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	36	甕B 1	16.0			暗褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	37	甕B 1	17.6			暗褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、内面頸部以下を刷毛で調整。
	38	甕B 2	15.6			灰褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	39	甕A 2	14.0			淡褐色	胎土に荒い砂粒含み、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	40	甕A 2	14.3			暗褐色	焼成は不良。
	41	甕A 2	20.0			暗褐色	口縁部内面に連続指頭圧痕、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	42	甕A 2	19.0			暗褐色	内面頸部以下を刷毛とヘラ削りで調整。
	43	甕A 2	18.0			暗褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	44	甕A 2	17.2			明褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	45	壺 ?	14.0			暗褐色	内外面をナデで調整。
	46	甕A 1	13.5	12.0?	12.0	灰黒色	口縁部をナデ、胴部を刷毛で調整。
	47	器 台	18.0			赤褐色	内外面を刷毛で調整。
	48	器 台	19.8			淡褐色	口縁部に平行沈線の施文後、連続円文を施す。
	49	器 台	23.4			暗褐色	口縁部に擬凹線(8条)を施し、内面は丹念なナデで調整。
	50	蓋	5.2	4.3	8.6 (最大径)	淡褐色	台付長頸壺の蓋。
	51	壺			17.9	淡褐色	台付長頸壺。赤色顔料塗布。
	52	器 台	16.0 (底径)			淡褐色	内外面をナデで調整。
	53	高 坯				暗褐色	外面を縦方向の刷毛で調整。
	54	高 坯				淡褐色	外面をヘラ磨きで調整。
	55	鉢	12.8	6.3		暗褐色	内外面ともヘラ磨きで調整。口縁付近はナデ調整。
	56	鉢	12.0	5.6		淡褐色	胎土に荒い砂粒含む。全体にナデであるが、外面の一部に刷毛目あり。
	57	鉢(埴?)	12.9	8.3?		明褐色	口縁部を横ナデ、胴部を刷毛で調整。赤色顔料塗布。
	58	鉢				暗褐色	刷毛調整。甌底部。
	59	鉢				暗褐色	刷毛調整。甌底部。

	番号	器種	法量(cm)			色調	調整・その他(胎土・焼成)
			口径	器高	胴径		
第 3 号 住 居 址	60	鉢				暗褐色	内外面ともヘラ磨きで調整。
	61	甕A 1	12.3			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成はやや不良。内面頸部以下をヘラ削りで調整。炭化物付着。
	62	甕A 1	15.3			明褐色	胴部に横方向の刷毛、内面頸部以下をヘラ削りで調整。炭化物付着。
	63	甕A 1	13.9			暗褐色	口縁部内面をヘラ磨き、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	64	甕A 1	15.0			赤褐色	内外面を丹念なナデで調整。広口壺の可能性あり。
	65	甕A 1	15.2			赤褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。炭化物付着。
	66	甕A 1	14.9			淡褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成はやや不良。内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	67	甕A 1	17.7			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成は不良。胴部に横方向の刷毛内面頸部以下をヘラ削りで調整。炭化物付着。
	68	甕A 1	16.3			暗褐色	胎土に荒い砂粒含み、焼成は不良。炭化物付着。
	69	甕A 1	23.0			明褐色	
	70	甕A 1	20.7			暗褐色	胎土に荒い砂粒含む。胴部を横方向の刷毛、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	71	甕A 1	18.2			暗褐色	
	72	甕A 1	20.0			黒褐色	
	73	甕A 1	19.0			暗褐色	内面頸部以下を横方向の刷毛で調整。炭化物付着。
	74	甕A 1	18.0			暗褐色	口縁部の一部に平行沈線を施し、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	75	甕A 2	15.6			赤褐色	
	76	甕A 2	16.9			灰褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	77	甕A 2	17.7			暗褐色	内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	78	甕A 2	17.8	22.5?	19.7	淡褐色	口縁部内面に連続指頭圧痕がみられ、頸部以下はヘラ削りで調整。胴部は縦方向の刷毛で調整。炭化物付着。
	79	甕A 2	18.0	27.5?	22.1	暗褐色	口縁部頸部以下は明瞭なヘラ削りで調整。胴部は縦方向の刷毛で調整。
	80	甕B 2	14.3	14.5	13.9	淡褐色	外面及び口縁部内面はナデによって仕上げる。内面頸部付近に刷毛が見られ、それ以下はヘラ削りで調整。
	81	壺	16.2			淡褐色	口縁部内外面を横ナデ、胴部を横方向の刷毛、内面頸部以下をヘラ削りで調整。
	82	器台				暗褐色	
	83	蓋	8.0	2.7		赤褐色	内外面ともナデ調整?
	84	高 坯	16.8			赤褐色	内外面とも明瞭なヘラ磨きを施す。
	85	小形壺	8.9	9.0~9.5		明褐色	内外面ともヘラ磨きで調整。
	86	小型壺	8.0			暗褐色	内外面ともナデ調整。

	番号	器種	法量(cm)			色調	調整・その他(胎土・焼成)
			口径	器高	胴径		
第 4 号	87	甕A2	17.2			赤褐色	胎土に荒い砂粒含み、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	88	甕A1	17.2			赤褐色	胎土に荒い砂粒含み、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	89	甕A1	16.5			灰褐色	胎土に荒い砂粒含み、胴部に縦方向の刷毛調整。炭化物付着。
	90	甕B2	14.3			淡褐色	内面頸部以下はヘラ削りと思われる。
	91	甕A1	14.8			灰褐色	胴部は縦方向は刷毛、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	92	甕A1	16.0			暗褐色	胴部は縦方向の刷毛、内面頸部以下はヘラ削りで調整。
	93	甕B2	18.4			淡褐色	口縁内外面を刷毛、頸部以下を刷毛とヘラ削りで調整。
	94	甕B1?	22.8			淡褐色	口縁内外面を横ナデ、頸部以下を刷毛とヘラ削りで調整。
	95	壺	15.3			赤褐色	内外面とも横ナデで調整。
	96	壺	16.3			明褐色	内外面とも横ナデで調整。赤色顔料塗布。
住 居 址	97	壺	15.2			赤褐色	内外面ともナデとヘラ磨き(不明瞭)で調整。赤色顔料塗布。
	98	壺	11.8			淡褐色	頸部外面の一部に刷毛。
	99	壺	13.9			赤褐色	内外面ともナデで調整。赤色顔料塗布。
	100	壺	15.0			明褐色	内外面ともナデで調整。
	101	器台?	21.3			赤褐色	胎土にやや荒い砂粒含み、内外面ともナデで調整。
	102	高 坯				淡褐色	
	103	高 坯	22.0			赤褐色	坯部はナデとヘラ磨き(不明瞭)、脚部は主にナデで調整。
	104	壺 ?	12.4 (底径)		15.6	暗褐色	屈曲部を荒目の刷毛、その他をナデで調整。粗大な台付壺の台部。

V. 総括

1. 出土土器とその年代

本遺跡より出土した古式土師器の編年的位置づけを述べる前に、これまでの北陸における古式土師器研究の歩みを簡単に振りかえってみたい。

北陸での古式土師器の研究は、石川県において浜岡賢太郎、吉岡康暢両氏により先鞭がつけられた。両氏は金沢市月影遺跡、河北郡高松町二ツ屋遺跡の資料を検討するなかから、月影→二ツ屋の編年的序例を想定した(浜岡、吉岡、1962)。その後、吉岡氏によって土師器編年の総括的な試みが行われた(吉岡、1967)。それによると、古墳時代に属する土師器は、7様式に細分され、第1～4様式が古墳時代前期、第5～7様式が古墳時代後期に比定された。なかでも、第1様式には金沢市月影遺跡や富山県小杉町中山南遺跡の資料を、第2様式には、二ツ屋遺跡をはじめ加賀市片山津玉造4号遺跡、富山市利波遺跡をこれにあてている。吉岡氏によって提示された編年案は、その後の北陸における土師器の編年研究の示準として高く評価されているものである。

一方、富山においては、県教育委員会によって、昭和38～43年に小杉町中山南遺跡の発掘調査が行われ、北陸東北部における土師第1様式の基準資料となる土器群が検出され(橋本他、1971)、その後に『富山県史、考古篇』において、上野章氏によって富山県での古式土師器をめぐる一定の総括がなされている(上野、1972)。これらは、今後の富山における土師器研究の基礎として逸することのできないものである。

その後、石川では、金沢市塚崎遺跡(吉岡、小島他、1976)、同市古府クルビ遺跡(橋本、高橋、1976)、同市高畠遺跡(橋本、1975)など古墳時代初期の良好な遺跡の調査があいついだ。なかでも、塚崎遺跡においては従来の土師第1様式(=月影式)の新旧の細分案が提示され、塚崎I式は弥生終末期に、塚崎II、III式は従来の土師第1様式に対応することが明らかにされた。つまり、弥生終末期に属する塚崎I式については、羽咋市柳田ウワノ遺跡溝状遺構A出土の資料との平行関係が想定され、塚崎II式は土師第1様式の古い部分に置くことができ、塚崎III式は、月影遺跡や金沢市下安原海岸と大略同じ様相のもので所謂「月影式」を内容とするもので、第1様式のなかでもより後出的な要素の強いものと理解された。これら塚崎II式ならびにIII式は、それぞれ「様式」として把えてよい内容を備えていることから、従来の第1様式を新旧に細分する試案がここで提示されたわけである。また、古府クルビ遺跡では第1様式に後続する良好な資料が検出され、高畠遺跡では幾内の布留式との親縁性が指摘される一群の土師器が発見された。それらは、各々、古府クルビ=第2様式、高畠=第3様式に対比され、従来までの各様式の内容を豊富化する資料群であると言える。

このような重要な遺跡の調査と新資料の増加という近年の趨勢に対応して、北陸という大地域圏のなかにあって、より微視的な小地域性にスポットをあてる中で、より精緻な編年作業を試行する傾向が出てきている(谷内尾、1980)。つまり、「小地域単位の編年を細かく進めつつ、地域編

気相互の横の関係を把える」(都出、1974) という方向性であると言えようが、とりわけ越中においては、これまでとは若干異なる様相も予想されるので、従来まで加賀、能登の資料を中心にして提示された編年的成果を再検し、その差異を明確にし、土師器編年を再構成するという基礎的作業のなかで上記の視点は活かされていくべきであろう。

ところで、本遺跡で出土した古式土師器の主要なものは「従来の土師第1様式の範疇を逸脱するものではないようである。だが、前述のような、塙崎遺跡をはじめとする石川における諸遺跡での弥生時代終末期～古墳時代初期の編年的研究の動向を参考にするならば、本遺跡出土の古式土師器はさらに細分することもある程度可能ではなかろうか。本遺跡の古式土師器の器種のなかで、最もまとまった量を示すのは別表のとおり甕形土器である。ここでは、それらを中心に述べていきたい。

甕形土器は大別すると、複合口縁を呈する一群（甕A群）と「くの字」口縁を呈する一群（甕B群）になり、さらに甕A群には、口縁部を横ナデ調整等により無文にするもの（A₁類）と平行沈線及び擬凹線等を施すもの（A₂類）とがある。また、甕B群には、口唇部に1cm前後の面取りを有するもの（B₁類）とほとんど面取りを行なわないか、行なっていてもわずかな面取りであるもの（B₂類）とがあることは前述したとおりである。

甕A群は、総じて頸部以下の内面ヘラ削りが卓越しているのがひとつ大きな特徴であるが、なかでもA₂類には徹底している。また、甕A₂類は口縁部に施す平行沈線の工具等の相違によっても次のようにバラエティーがある。(ア)貝殻の腹縁を用いるもの(イ)櫛状工具によるもの(ウ)工具は一定しないが一本毎に引いたもの(エ)ヘラ磨きにより凹線状にしたもの、などである。ティピカルな「月影式」の甕とされた口縁部先端が著しく外反するものは、口縁部は(ア)のように貝殻等による6～9条程の浅く細い擬凹線でうめるものであり、口縁内面に連続指頭圧痕がみられるのもひとつの特徴である。このタイプのものは2号住居址、3号住居址より若干検出された以外はあまり多くない。その他の甕A₂類は、口縁部が直立気味ないしゆるやかに外反するもので、口縁部も前者に比べて肥厚気味で、平行沈線の工具も(イ)のように櫛状工具によるものが多く、(ウ)なども若干見られ一定ではない。

甕A₂類の前者（A₂-a）は、塙崎遺跡での土師第1様式の新旧細分案では、塙崎III式の典型的な甕形土器とされたものであり、後者（A₂-b）のグループは、塙崎II式のなかで平行沈線及び擬凹線を有する複合口縁の甕形土器に近似するようであり、小杉町中山南遺跡における同種のものの中で主体をなすものと同様のものと思われる。甕A₂-a類は、管見に入るかぎりでは小杉町上野遺跡(橋本、小島1971)、氷見市矢ノ方遺跡(上野、1912)、滑川市本江遺跡(小島、1976)などでみられるが、富山における土師第1様式の基準資料とされた中山南遺跡の土器群ではA₂-b類が卓越している。

甕A₂-a類は、胴部の器厚が僅か5mm程であり、このように器厚を極めて薄く仕上げるのは、所謂「庄内式」の盛行した畿内をめぐる外縁的地域でのひとつの技法的共通性と言える。畿内の

時期 住居址	弥 生	古 墳		
	柳田ウワノ	土 師 第 1 様 式		土师第2様式
	塚 崎 I	塚 崎 II	塚 崎 III	吉 府 ク ル ビ
1号住	■■■	■■■		
2号住		■■■		
3号住		■■■■■		
4号住		■■■		

第6表 各住居址の所属時期想定表

外縁的地域におけるこのような技法的共通性が何を示唆するのかは今後の課題であるが、この典型的な「月影式」の甕形土器は、爾来前段階における小地域差が解消の方向に向かい斉一化されていく一示標と考えられてきた。だが、越中において現状では、そのような現象は顕在的には指摘しがたい状況であり、越中における塚崎III期の実態については不明な点が多いようである。

また、3号、4号住居址などで甕形土器の主流をなす甕A₁類は、口縁が直立ないしゆるやかに外反して立ち上がり、口縁内外面をナデ調整を行うのが一般的である。胴部外面の調整は、刷毛が多用されており、内面ヘラ削りは甕A₂類ほど徹底しておらず、内面未調整のものもかなり認められる。甕A₁類の分布の中心は、北加賀から越中にかけての地域が考えられており(西野、1980)、富山県内の古式土師器を出土する遺跡ではかなり普遍的に見られ、中山南遺跡では甕形土器の主流をなしている。

甕B₁類は、1号住居址で若干まとまって検出できたが、口縁端部が肥厚し面取りを行う7~9のタイプが主流であり、口径と胴径がほぼ同じぐらいになるものと胴径が口径をしのぐものの二者がある。中山南遺跡において〈甕C13類〉と分類されたものに近いものもある。このグループの胴部の形態は、甕A群のそれと類似するものなどもあり、典型的なくの字状口縁を呈するB₂類と甕A群との折衷的な様相をもつものと言える。器外面の調整は、横ナデや刷毛調整であり、内面調整は刷毛を施すものと頸部以下をヘラ削りを施すものが卓越しており、技法的にもA類とB類の折衷型と言えよう。

甕B₂類は、1号及び4号住居址で若干見うけられるが、口縁部は丹念な横ナデで調整され、胴部は縦方向の刷毛目をもつものが多い。内面調整は、(ア). 刷毛目がみられるもの(11、93、94)(イ). ナデによるもの(4、5、90)、(ウ). ヘラ削りが行われるもの(1~3)であり、(ア)及び(イ)は若干古調を呈するようであるが判然としない。甕B群において器内外面ともに刷毛目がみられるグループは、系統的に加賀、能登との関連以上に、内外面とも刷毛ナデ調整が卓越し、くの字口縁の甕が主流を占める新潟県緒立遺跡(緒立II式)との関連性が強く考えられるのではなかろうか(上原、永峯他、1967)。

本遺跡における古式土師器について、甕形土器を中心にその特徴を愚考してきたが、第1号～4号までの各住居址と土器群の時期について考えてみたい。結論から言えば、別表のように考えている。

第1号住居址において、甕A群とB群は、21：17で他の住居址に比べて甕B群が若干目立つ存在になつておらず、甕A群のほとんどが覆土中からの出土であるのに対し、甕B群は床直上から出土する傾向にある。甕B群には前述のように古調を呈するものと思われる一群もあり、器内外面を刷毛ナデにより仕上げた高坏（26、29）や、特異なプロポーションの小形壺（23）なども、第1号住居址を今回調査した住居址中、古いグループに位置づける証左になるであろう。また、土器の総量は少ないが、第4号住居址についても、複合口縁縁壺が多くみられるなど器種構成が特異であるが、第1号住居址とはほぼパラレルに考えておきたい。

次に、第2号住居址については、平行沈線及び擬凹線を有する甕A₂類が量的には最も多いが、ほとんどA₂-b類であることから、第1様式古期（塙崎II式）と位置づけてよいであろう。高坏については、全て破片のみであるが、中山南遺跡などで主体をなす坏部が稜からラッパ状に大きく外反するタイプが多いようである。壺は若干不明瞭であるが、鉢形土器や器台などもまとまっており、第2号住居址の土器群は、第1様式古期（塙崎II式）の器種構成をうかがえる資料と言えよう。

第3号住居址では、出土土器総量では他の器種を混えるものの、甕が圧倒的に多い。だが、甕A群が非常に卓越した様相を示しており、甕B群はほとんど小片が認められるにすぎない。また、他の住居址に比べて、床直上出土の土器が極めて少ないと本住居址の特徴のひとつであり、器種構成における偏在性と合わせて、本住居址における土器群のほとんどが〈廃棄〉の状況を呈して出土していることに起因することであろう。甕形土器では、A₁類とA₂類がほぼ同じ割合で出土しており、A₂類のなかには、前述のようにティピカルな「月影式」の甕と考えられるA₂-a類が比較的まとまって認められ、第1様式新期（塙崎III式）と位置づけてよいグループである。高坏においては、坏部が小さく脚部がラッパ状に大きく開くもの（84）が出土している。

この第3号住居址の土器群は、富山県下において第1様式新期（塙崎III式）の土器群が遺構より出土した数少ない例と言えよう。だが、若干古調を呈するものと混然となつて検出されており、吉岡氏らによって提示された「塙崎III式」の内容を充分に満たすものではなく、おそらく出土土器の大半が〈廃棄〉によるという本住居址の特殊性も考慮しなければならないだろう。越中における「塙崎III式」の様相については、古墳発生前夜における諸問題の解明を含めて今後の課題であろう。

2. 集落と墓群の構成

今回の調査で検出された住居址は、全部で5棟である。そのなかで、壁の一部を検出しただけの第5号住居址を除き、ほぼ全掘したものは小型の第4号住居址のみであり、その他は半分か、それを若干越える程度の面積を調査したに留まる。前述したように、これら4棟のなかでも平面プランや、側壁の高さ、周溝の形態とその有無などにより変化が認められる。

なかでも第4号住居址は、床面上より炭化材が多く発見され、火災により倒壊したものか、あ

るいは人為的に火をつけて燃やしたものかと考えられる。この第4号住居址は、規模が小さく、柱穴等も調査時では不明であり、それに加えて他の住居址が主軸方向をほぼ同じにしているのに対し、本住居址のみが異なっているのもひとつの特徴と言える。住居址内出土の土器より、土師第1様式古期（塚崎II式）を下らないものと思われる。土器において若干新しい様相を含む2号住居址は、この4号住居址に比べて側壁も高く、住居内内をめぐる周溝がかなり明瞭に造られており、その構造において著しい差異が指摘できる。また、時期的に若干下ること（塚崎III式）が予想される3号住居址は、柱穴が2本で構成される2本支柱Y型（橋本、1977）の住居であり、これも上屋構造において他の住居址に比べて特異な存在である。

このように時期的に若干のずれが考えられるものの、ほぼ同じ時間帯にあって規模、面積や内部構造及び上屋構造等の差異があるのはどのような事態を示唆するものであろうか。4号住居址については、柱穴が未検出という特異性も勘案して機能上の差異が考えられるが、同時に共同体員間における階層的な差異も考慮していく必要があると思われる。だが、今回の調査においては住居内出土遺物の著しい違いなどを指摘することは不可能であり、これ以上、立入れる問題ではないようである。

ところで、古式土師器の出土は、第2調査区においてA8～H8グリッドより東側であり、出土地点の偏在性が指摘できる。おそらく、住居址群（住居域）は現在の櫛田神社社叢を中心とする東側台地の縁辺部に環状ないしは半環状に占地していたように考えられる。また、北側に位置する宮川邸（櫛田神社宮司）があり、整地の際に土師器が出土したと伝えられることから集落はかなり広範な範囲を占めていたように思われる。

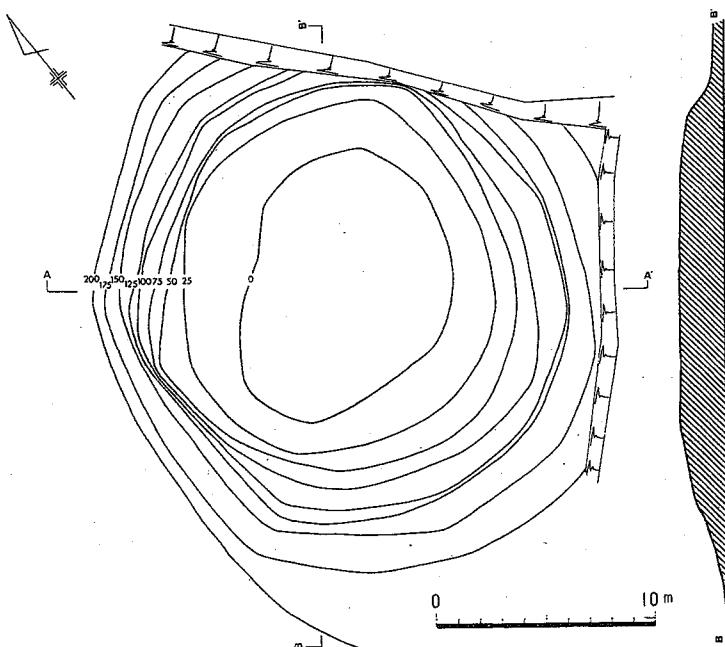
（註6）

これに対して、現在、大沢山の台地上には墳丘墓と思われる円丘状のマウンドが三基存在している。昭和47年の調査では、1号墳、2号墳が調査され、その出土遺物から大よそ古墳時代初期（土師第1様式）に属するものとされた（橋本、神保、1973）。3号墳は、未調査であるがほぼ同じ時期の所産と考えてよいであろう。現在、遺跡の東側の一部は土砂採取のため崖状になっているが、地元の住民によるとこの付近にもかつて2基の墳丘が存在したと伝えられている。また、第1号墳と第2号墳の間にも僅かであるが地表の高まりが確認でき、これを墓群のひとつに加えることも可能である。

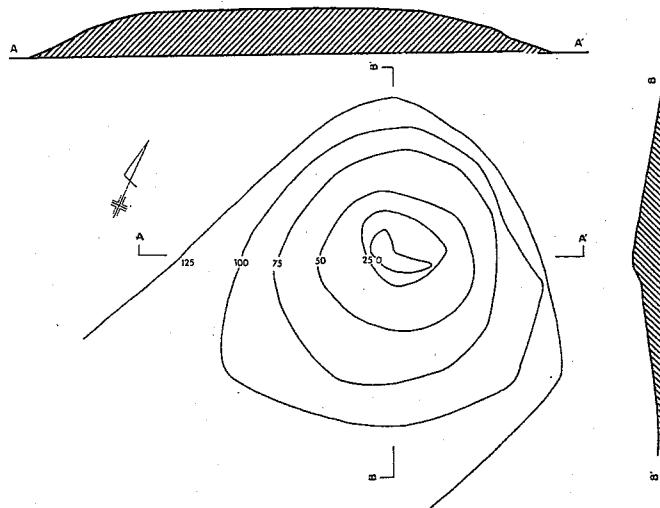
加えて、昭和55年に実施した環境整備事業に伴う試掘調査では、第3号墳の南方約50mの付近にも方形周溝墓の一部と思われる溝状遺構が確認でき（中山、1981）、また第3号墳東側の土砂採取による崖面からも、方形周溝墓と思われる落ち込みを観察することができた。

以上のような所見から、方形周溝墓と5期以上の墳丘墓が大沢山の東側台地上にある程度群在していたことは、ほぼ確実と言えよう。時期的には、越中において定型化した古墳（前方後円墳、前方後方墳）が出現する前段階である弥生時代終末期～古墳時代初期の所産と考えられる。先に予想したように、この墳墓群は、1号～3号墳のように墳丘がある程度明確に残されているようなグループと、盛土が不明瞭な方形周溝墓などのグループとから構成されるようである。このような築成方法を含めて形態上異なる墳墓が、ほぼ同一の時間帯にあって営まれており、この形態上の差異の

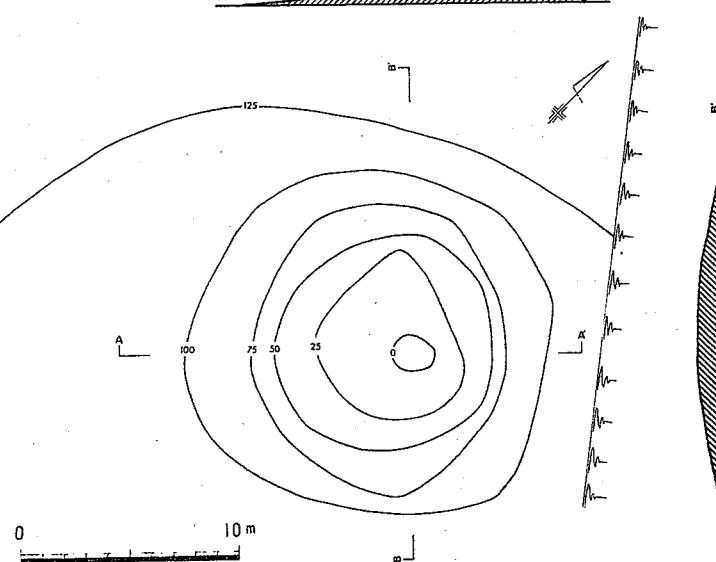
（註7）



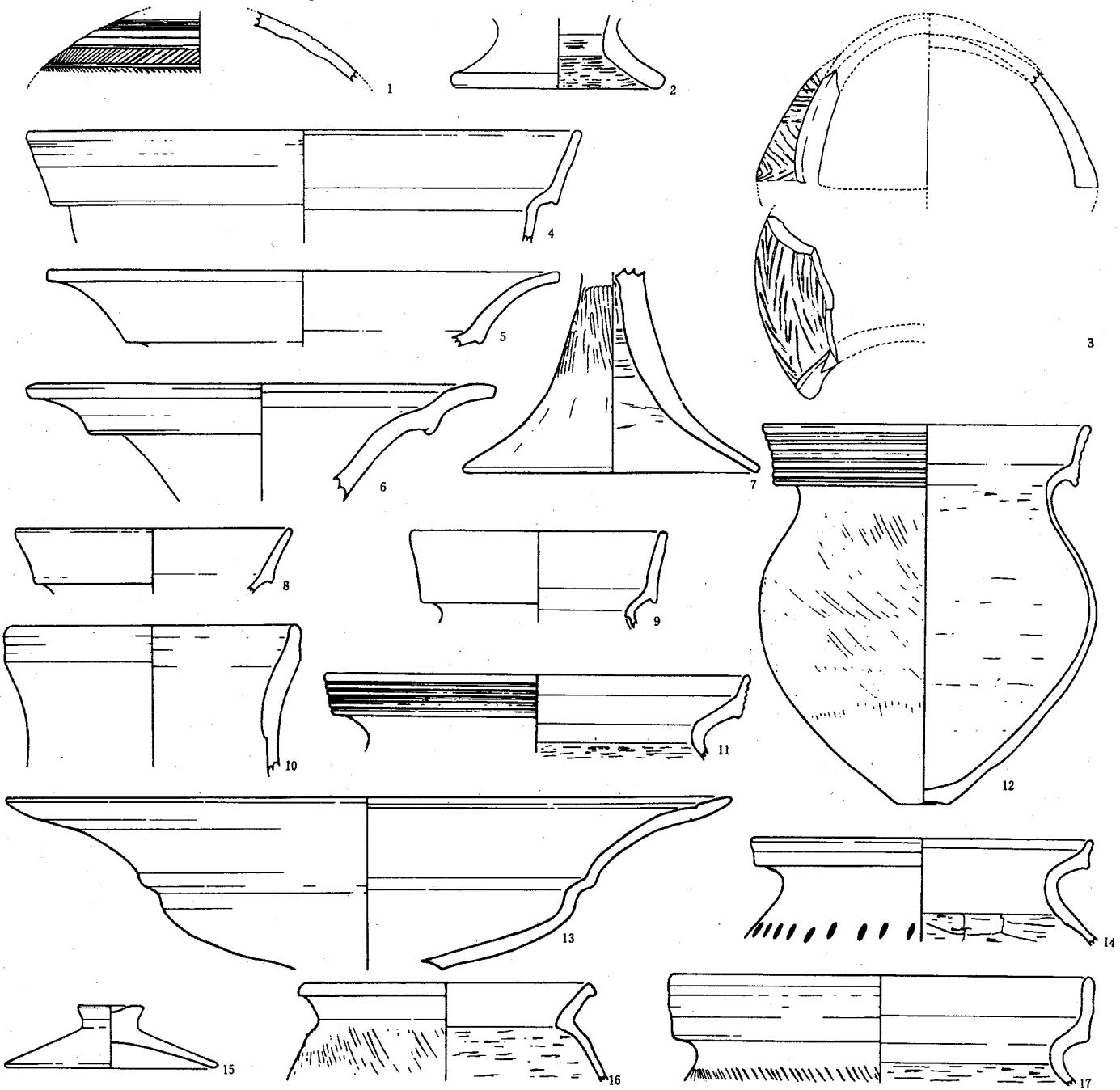
第19図 第1号墳実測図(1 / 400)



第20図 第2号墳実測図(1 / 400)



第21図 第3号墳実測図(1 / 400)

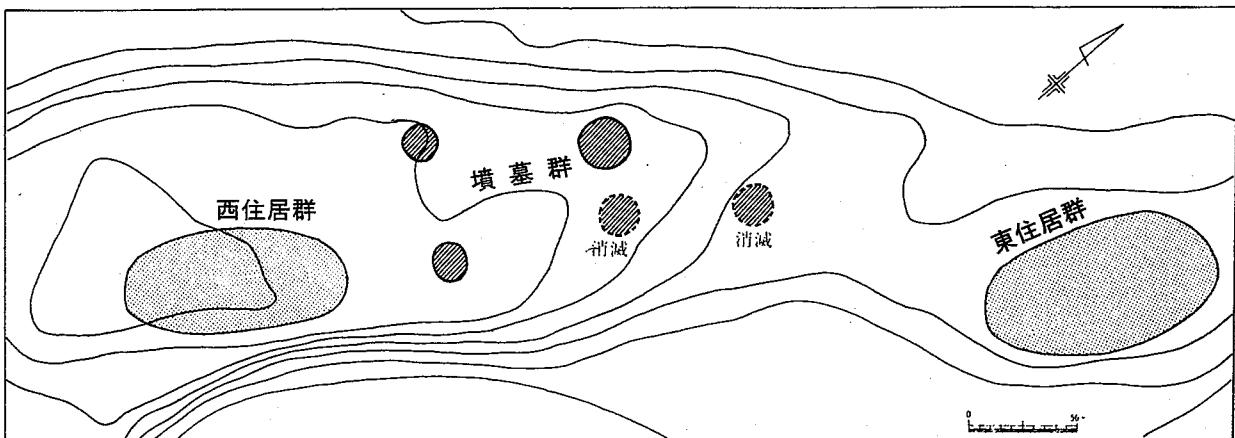


第22図. 第1・2号墳出土の土器 (橋本他. 1973より転載)

(註8)

背後になんらかの共同体成員における階層的関係を想定することができるのでなかろうか。

富山県内において、方形周溝墓は小杉町囲山遺跡(橋本、1970)、富山市杉谷遺跡(藤田、1975)、小矢部市平桜川東遺跡(上野、伊藤、神保、1979)、同市樋掛遺跡、上市町飯坂遺跡などがあるが、本遺跡と時期的にパラレルに考えられるのは、杉谷遺跡及び平桜川東遺跡であり、囲山遺跡飯坂遺跡については若干遡るものと思われる。なかでも、本遺跡と同じように墳丘を有する墓群と近接して築成されているのは杉谷遺跡である。杉谷遺跡付近には、様々なバラエティーをもつ墳丘を有する墓が発見されているが、串田新遺跡の墳丘墓のように明確なプランを有せず円丘状



第23図 住居群と墳墓群の位置関係図

の形態をとるもとに類似する例は、杉谷3番塚である。串田新遺跡に所在する墳墓群の位置づけをめぐっては、県内における諸事例や、七ツ塚墳墓群（橋本、谷内尾、1977）など加賀、能登との比較研究のなかで達成されるべき問題であろう。

ところで、今回の調査で検出された住居址群（集落）は、上記の墳墓群とほぼ同じ時期の所産であることは前記したが、北東地区の集落はこれら墳墓群を構成するひとつの単位集団と考えることが可能なのではあるまいか。一方、大沢山丘陵上の東側縁辺部からも古墳時代初期の所産と考えられる住居址が検出されており（橋本、神保、1978、中山、1981）、この付近にも当該期の集落があつたものと思われる。このことから、墳墓群を構成する集団は、少なくとも墳墓群を挟んで東側と西側の集落に居住した集団であつたと推定されるのである。

いずれも、集落としての全容が明確ではないが、東西の各々の集落に対応する集団を世帯共同体と仮定すれば、同一の墓域を共有した世帯共同体群＝農業共同体と展開することが可能なのではなかろうか。また、本遺跡付近で同一時期と想定できる集落として、沖積地上に立地する大門町島鉢田遺跡などがある。当地域の農業共同体の実態と動向については、このような沖積地に立地する遺跡との関連のなかで解明されていくことだろう。

ともあれ、本遺跡においては墓域と住居域が一定の限られた範囲に画然と区別されて存在しており、その背後に〈空間〉に対する一定の共同体規範が存在したことがうかがわれる。それは、当時の人々の他界観の表出と言えるのではなかろうか。

このように、墳墓と生活跡がセットとして抑えられた事例は、石川県七ツ塚墳墓群と塚崎集落、神奈川県歳勝土墳墓群と大塚集落が著名である。今回、調査された住居址群は、大沢山丘陵上の墳墓群との関連の中で〈遺跡群〉と把えた時、はじめて生動的な歴史像へと迫る問題を提起するものであり、今後の当該期の遺跡群研究のなかで重要な位置を占める遺跡と言えるだろう。

3. まとめ

1. 今回の調査で検出された遺物は、先土器時代、繩文時代中期、古墳時代初期の広範囲な時代

にわたるものであるが、なかでも古墳時代初期の遺物等が9割以上を占めている。また、先土器時代の石刃（ブレイド）は一点のみの出土であるが、串田新遺跡の上限年代を考えるうえで貴重な資料である。

2. 古墳時代初期の遺物は、ほとんどが古式土師器であり、従来の編年における土師第1様式の範疇を逸脱するものではない。今後、越中における土師第1様式の細分及び様式構造を考えていくうえで示準となるものであろう。ここでは、土師第1様式古期（塚崎II式）を中心に、第1号住居址の土器群は若干古い様相を呈し、第3号住居址の土器群は新しい様相（塚崎III式）を呈することを指摘しておいた。

3. 古墳時代初期の住居址は、5棟発見されているが、規模やプランに若干の差異が認められる。第1号及び2号住居址は方形に近いプラン、3号及び4号住居址は、隅丸方形のプランを呈している。なかでも、第3号住居址は2本支柱Y型の住居であり、その類例は県内では4例ほど確認されている。また倒壊住居の可能性の高い第4号住居址は、規模も小さく一般住居と言うより、若干異なる機能を持つようである。

4. 大沢山の丘陵上に所在する三基の墳丘墓（国指定地内）や方形周溝墓についても、上記の住居址群と同時期の所産と思われる。このように墳墓と生活跡が一体となった著名な例は、石川県七ツ塚墳墓群と塚崎遺跡などがある。本遺跡では、墳墓群を挟んで東西に二つの集落が存在することが予想され、越中における弥生時代終末期～古墳時代初期の複雑な社会構造を解明する重要なフィールドのひとつと言える。今後、今回の調査区も、国指定地区を中心とした串田新遺跡と一体として保存していく必要があるだろう。

5. 今回の調査は、今まで継続中の串田新遺跡環境整備事業の第2次計画以降の基礎資料を収集するための調査であったが、以上のように予想外の成果をあげることができた。串田新遺跡は、縄文時代中期の標式遺跡としてかねてより著名であつたが、今回の調査で丘陵の北東部一帯は古墳時代初期の墳墓と集落を内容とする良好な遺跡であることが判明した。

この諸成果を、第2次計画以降の環境整備事業のなかで活かして行き、また資料館等の展示施設により当遺跡の重要性を一般に普及していくことは、今後の大門町における文化財行政の重要な環を形づくるものであるだろう。さらに、隣接する櫛田神社と連動させることにより、大門町のみならず富山県の歴史的風致地区として活用していくことは、現代に生きる私達に荷せられた使命ではなかろうか。

註

(註1) 「墳丘墓」と言う用語を使用するにあたって、古墳時代の開始をめぐる問題と低触せざるをえないため、自分なりの若干の整理をしておきたい。

古墳時代の開始をめぐっては、近年多くの論議の対象となってきた。墳丘の規模や内部構造において、集団墓段階の墓制との継続を認めそれ以後を古墳時代とする立場（石野、1978、間壁1977）と、定型化した前方後円墳、前方後方墳の成立と波及、副葬品のセット、石室構造の完成をもって古墳時代の成立とする立場（近藤、1977、都出、1979）があり、対立しているのが現状である。近年、調査された樋築（岡山）、黒宮大塚（岡山）、纏向石塚（奈良）などの墳墓をはじめ、山陰の「四隅突出型墳」などは、前者の立場に従えば「発生期古墳」とみなされるのに対し、後者においては弥生時代の墳丘墓と理解される。そして、古墳時代の開始年代について、畿内において、前者では遅くとも庄内式の時期には始まっていると考えるのに対し、後者では布留式の時期とするわけである。

ここで使用する「墳丘墓」と言う用語については、後者の立場に拠っている。古墳時代の開始を、定型化した前方後円墳の出現と波及＝畿内政権による首長権継承儀礼の改編、統合、つまり古墳祭儀の完成とそれをめぐる政治的ヒエラルキーの定立と言った前代との〈隔絶性〉を示標とするわけであるが、諸地域によって古墳時代の開始には、若干の年代的ズレを勘案せざるをえない。そのため、それまでの集団墓的な段階から、前記の樋築、纏向石塚、黒宮大塚などの在地系首長墓と言うべき墓群が出現する古墳発生前夜＝過渡期をいかに評価するかと言った問題はたえず浮上するわけである。

原理的に、「古墳」が畿内と北陸、山陰といった他地域との権力関係の表徴、換言すれば〈地域一間一権力〉構造の表徴と規定できるのに対し、弥生終末期を中心とした狭義の「墳丘墓」は、たとえば北陸などの一地域における〈地域一内一権力〉構造の表徴と規定できるのではなかろうか。いわば、それが「古墳」に内在する〈隔絶性〉の実体であり、狭義の「墳丘墓」に内在する〈在地性〉の実体と言えるのではなかろうか。

「墳丘墓」概念とは、現在的に、あくまで形態的な類同性による方法概念として的一面を有しているが（広義の「墳丘墓」）、将来的にさらに鍛磨されるべき概念であろう。それに対し、「古墳」という概念は、時代区分の示標となる歴史的な総括概念と言えよう。そのため、「墳丘墓」と言るべきものは、弥生時代であっても古墳時代であっても存在するのに対し、弥生時代の「古墳」なるものは論理的に成立しない理由はここにある。

(註2) 昭和55年（1980年）に大門町教育委員会が実施した県道改良工事に伴なう試掘調査で、縄文時代前期後葉の土器（蜆ヶ森式？）が発見された。遺跡は庄川の新扇状地上に立地しており、立地の特異性が注意される。昭和56年度に本調査を実施予定。

(註3) 昭和55年（1980年）に大門町教育委員会が、本調査（記録保存）を実施した。奈良時代末（8世紀後半）に属する堀立柱建物群と、近世の遺構群を数多く検出した。報告書近刊。

(註4) 富山県内において、2本支柱Y型の住居型の例としては、小杉町中山南遺跡5号、6号住居址、滑川市本江広野新遺跡2号住居址、小矢部市平櫻川東遺跡1号住居址等があげられる。

(註5) 床面上からは、あまり土器等の遺物が出土せず、主に覆土中から出土する現象は、「吹上パターン」等として縄文時代の竪穴住居址の調査事例から数多く指摘されているが、近年、古墳時代等の住居址の調査においても指摘されてきている。だが、時代を越えて存在する〈廃棄〉行為の実体については、その時代における社会的諸関係のなかで考えられるべきものであり、一律に把えることはできないと思われる。

(註6) (註1) 参照。

(註7) 越中における前期古墳としては、高岡市桜谷2号墳（帆立貝式前方後円）、婦中町勅使塚古墳（前方後円）が4世紀末～5世紀初頭に、高岡市桜谷1号墳（前方後円）、婦中町王塚古墳（前方後方）が5世紀初頭に対比されている（古岡、1972）が、古墳研究の現況に則せば、若干時期的に遡って考えた方が妥当ではないだろうか。

(註8) このことをめぐって、藤田富士夫氏は、富山市杉谷A遺跡の分析の中から、方形周溝墓のような墳丘を持たないものと、明確に墳丘を有する杉谷4号墳＝「四隅突出形古墳」との対比において、前者を共同体員協同以下の労働主体によるものと、後者を共同体間協同によるものとする興味深い試論を開陳されている（藤田、1979）。

引用参考文献

- イ. 石野博信・関川尚行 1976 『纏向』 橋原考古学研究所
石野博信 1978 「古墳の発生」 歴史公論 3月号
- ウ. 上野章 1972 「弥生時代 付、古式土師器」 『富山県史考古編』
上野章・伊藤隆三・神保孝造 1979 『小矢都市平桜川東遺跡発掘調査概要』 小矢部市教育委員会
上野章・池野正男 1980 『小杉流通業務団地内遺跡群、第2次緊急調査概要』 富山県教育委員会
上原甲子郎・永峯光一・磯崎正彦 1967 「越後緒立遺跡における古式土師器の一型式」
考古学雑誌第52巻第3号
- オ. 岡崎卯一 1976 「第一章、第四節古墳時代の文化」 『富山県史通史編1、原始、古代』
- キ. 木倉豊信 1959 『小杉町史』
- コ. 小杉高等学校地歴班 1952 『串田新遺跡発掘調査報告書』
小島俊彰 1972 「縄文中期」 『富山県史考古編』
小島俊彰 1976 「本江遺跡」 『滑川市考古資料編』
近藤義郎 1977 「古墳以前の墳丘墓」 岡山大学法文学部学術紀要第37号(史学篇)
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1975 『歳勝土遺跡』 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- シ. 塩 照夫 1964 『生源寺窯址調査報告書』
神保孝造・岡上進一・松本幸治 1977 『砺波市巖照寺遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
神保孝造・岡上進一・橋本正春 1978 『砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- タ. 大門町 1977 『串田新遺跡環境整備 基本計画』
- ツ. 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」 考古学研究第20巻第5号
都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」 考古学研究第26巻第3号
- ト. 富山県教育委員会 1965 『太閤山遺跡調査報告書(上)』
- ナ. 中山修宏 1981 『串田新遺跡III、昭和55年度環境整備に伴う調査』 大門町教育委員会
- ニ. 西井龍儀 1972 「先土器時代」 『富山県史考古編』
西野秀和 1980 『津幡町谷内石山遺跡』 津幡町教育委員会
- ハ. 橋本 正 1970 『因山遺跡』 富山県教育委員会
橋本 正・小島俊彰 1971 『小杉町上野遺跡調査概要』 富山県教育委員会
橋本 正・小島俊彰・藤田富士夫 1971 『小杉町中山南遺跡調査報告書』 富山県教育委員会
橋本 正・神保孝造 1973 『串田新遺跡発掘調査概報』 富山県教育委員会
橋本 正 1974 a 『小杉町上野遺跡』 富山県教育委員会
橋本 正 1974 b 『16-28山王宮一号古墳』 日本考古学年報25
橋本 正・神保孝造 1974 『小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
橋本 正 1976 『大沢野町直坂II遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
橋本 正 1977 「竪穴住居址の分類と系譜」 考古学研究第23巻第3号
橋本澄夫・谷内尾普司 1974 『金沢市七ツ塚墳墓群、北陸自動車道関係埋蔵文化財調査概報』
石川県教育委員会
- 橋本澄夫 1975 『金沢市高畠遺跡』 金沢市教育委員会
橋本澄夫・高橋 裕 1976 『古府クルビ遺跡』 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』
石川県教育委員会
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 1962 「加賀、能登の古式土師器」 古代学研究第32号
- フ. 藤田富士夫 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』 富山市教育委員会
藤田富士夫・関 清 1975 『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』 富山市教育委員会

- 藤田富士男 1977 「北陸における古墳発生期の一様相」『日本考古学協会昭和52年度大会研究発表要旨』
- 藤田富士夫 1979 「方形周溝墓の築成からみた被葬者の性格について」かんとりい3号
- 古岡英明 1972 「古墳時代」『富山県史考古編』
- マ. 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司 1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古学集第13号』
- ム. 邑本順亮 1981 「郷土を育んだ自然」『大門町史』
- ヤ. 谷内尾普司 1980 「石川考古学研究会古墳部会 第2回例会資料」
- ヨ. 吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」月刊考古学ジャーナル第6号
- 吉岡康暢・小嶋芳孝・田嶋正人他 1976 「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』
石川県教育委員会

Daimon Archaeological Record No. 2

KUSIDASIN SITE II

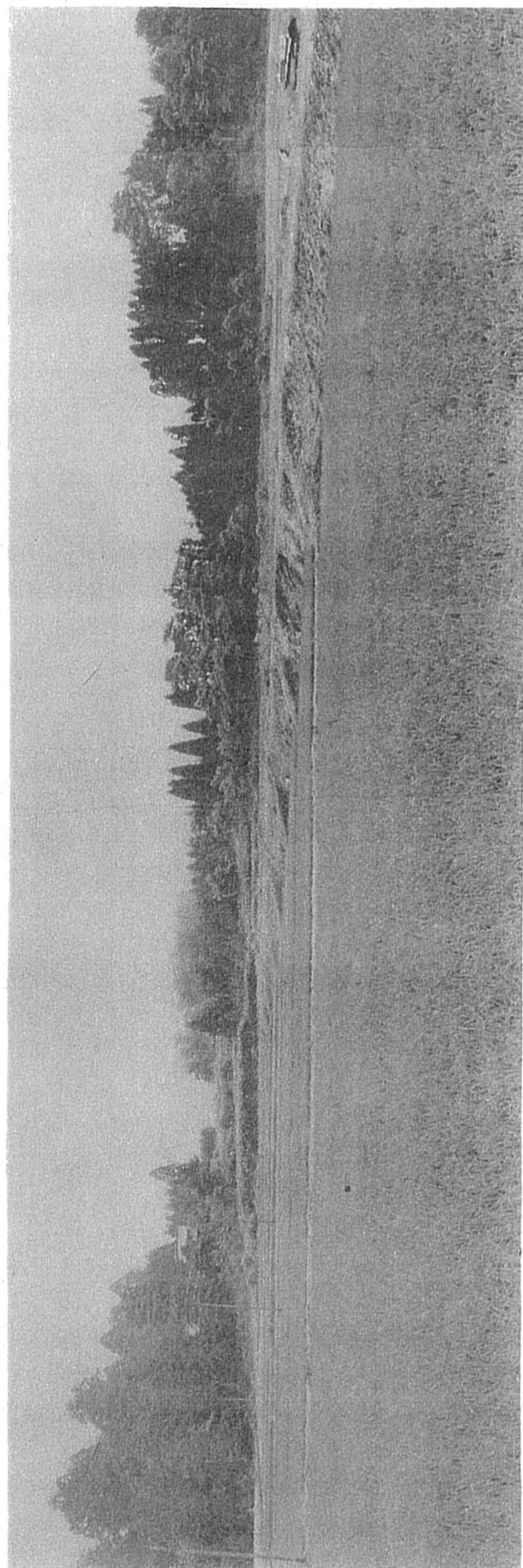
Daimon, Toyama Pref.

1981

Board of Education of Daimon
Japan

一覧図

遠跡遠景(西側平野部より望む)



第1調査区

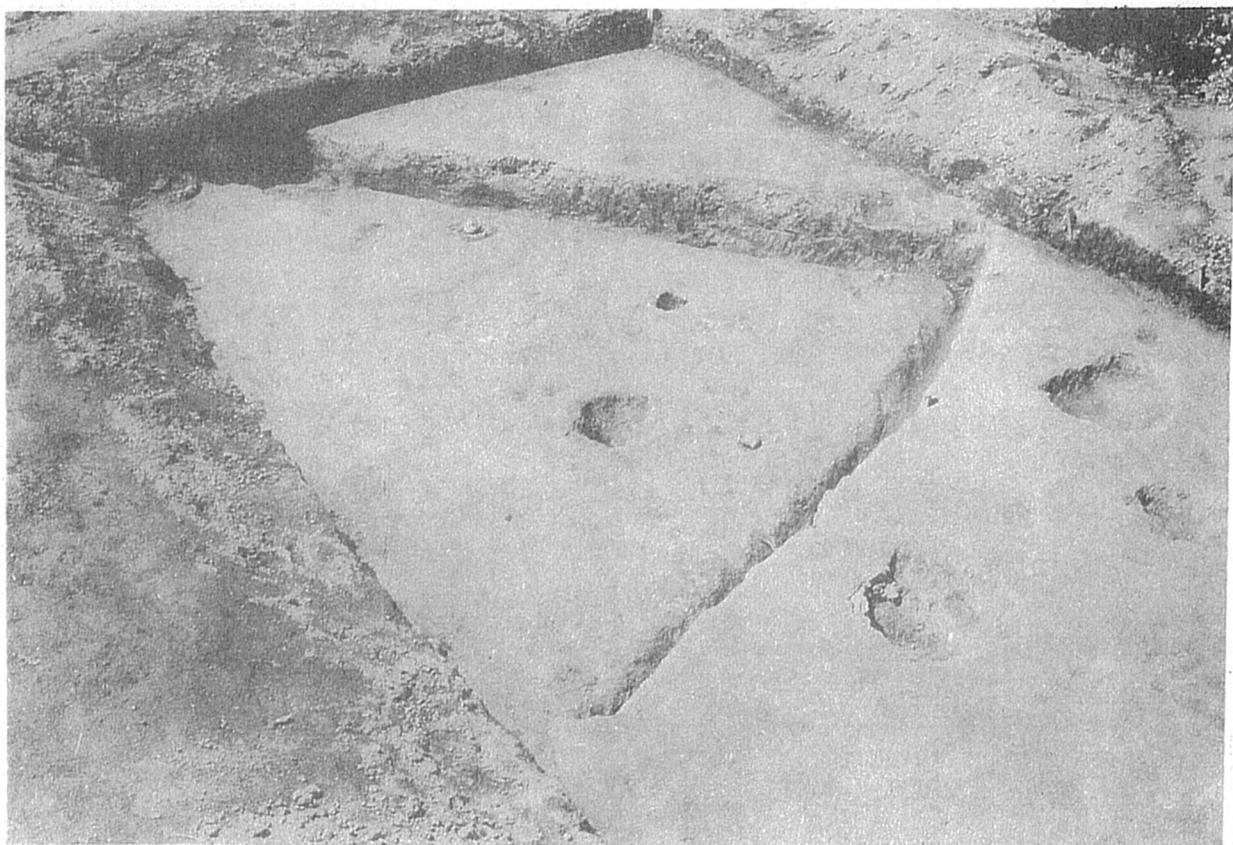


第2調査区





第2・3・4号住居址



第2号住居址



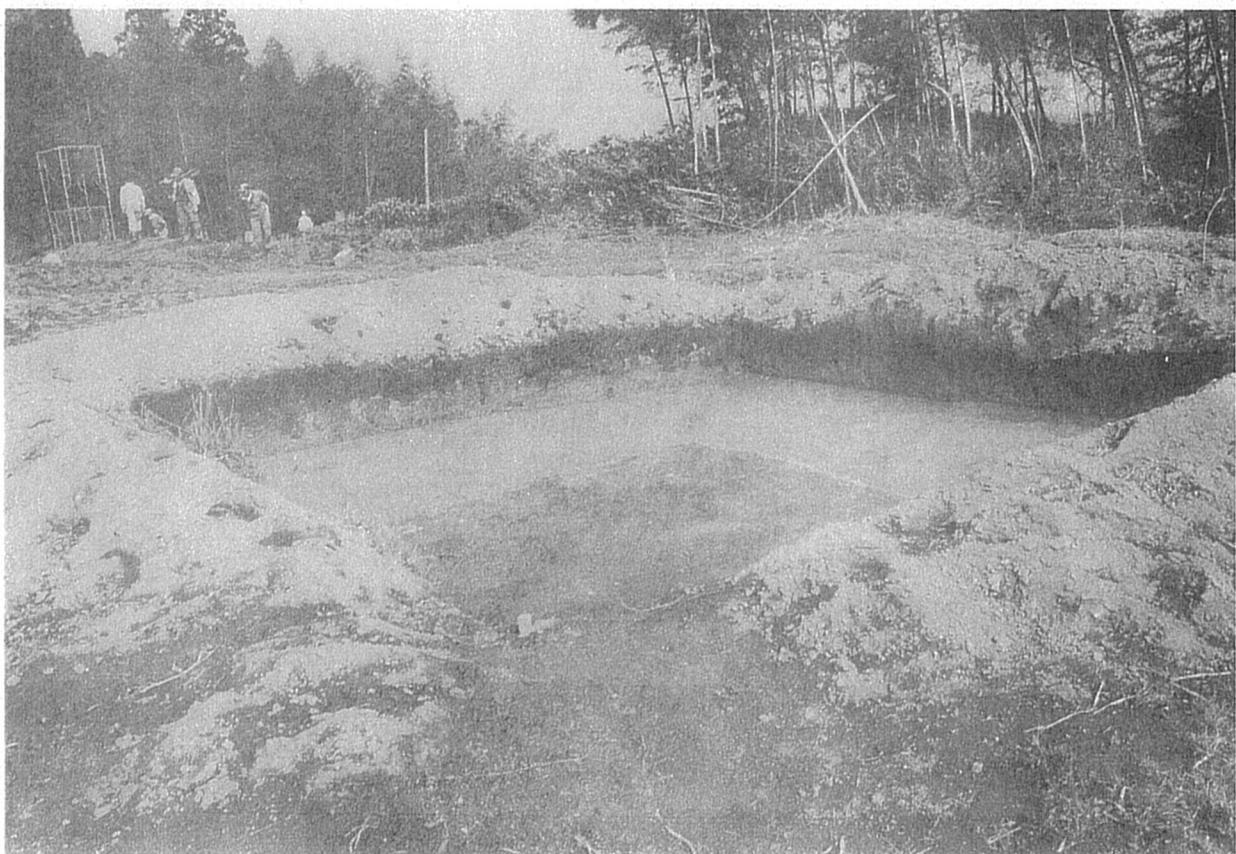
第 3 号 住 居 址



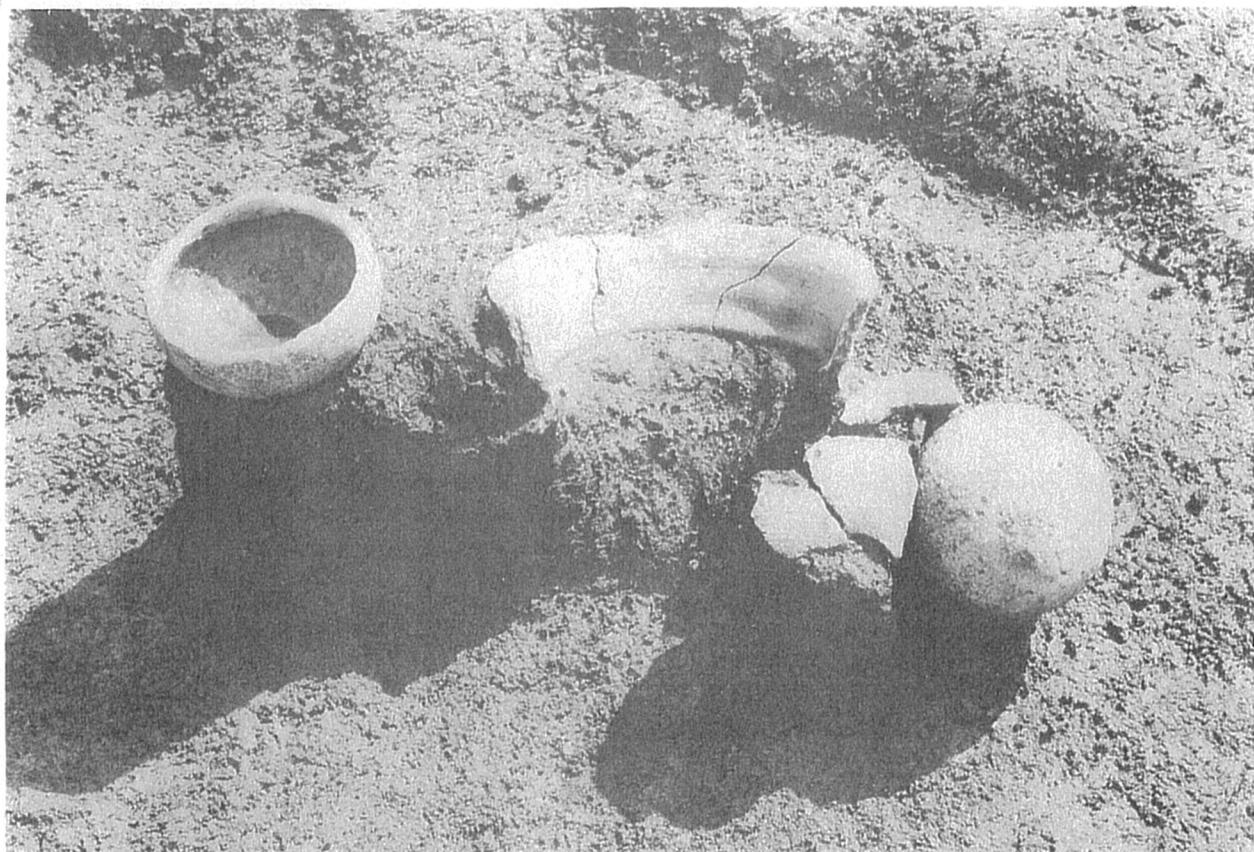
第 4 号 住 居 址



第1号住居址



先土器時代石器出土グリッド（第2調査区A-8）



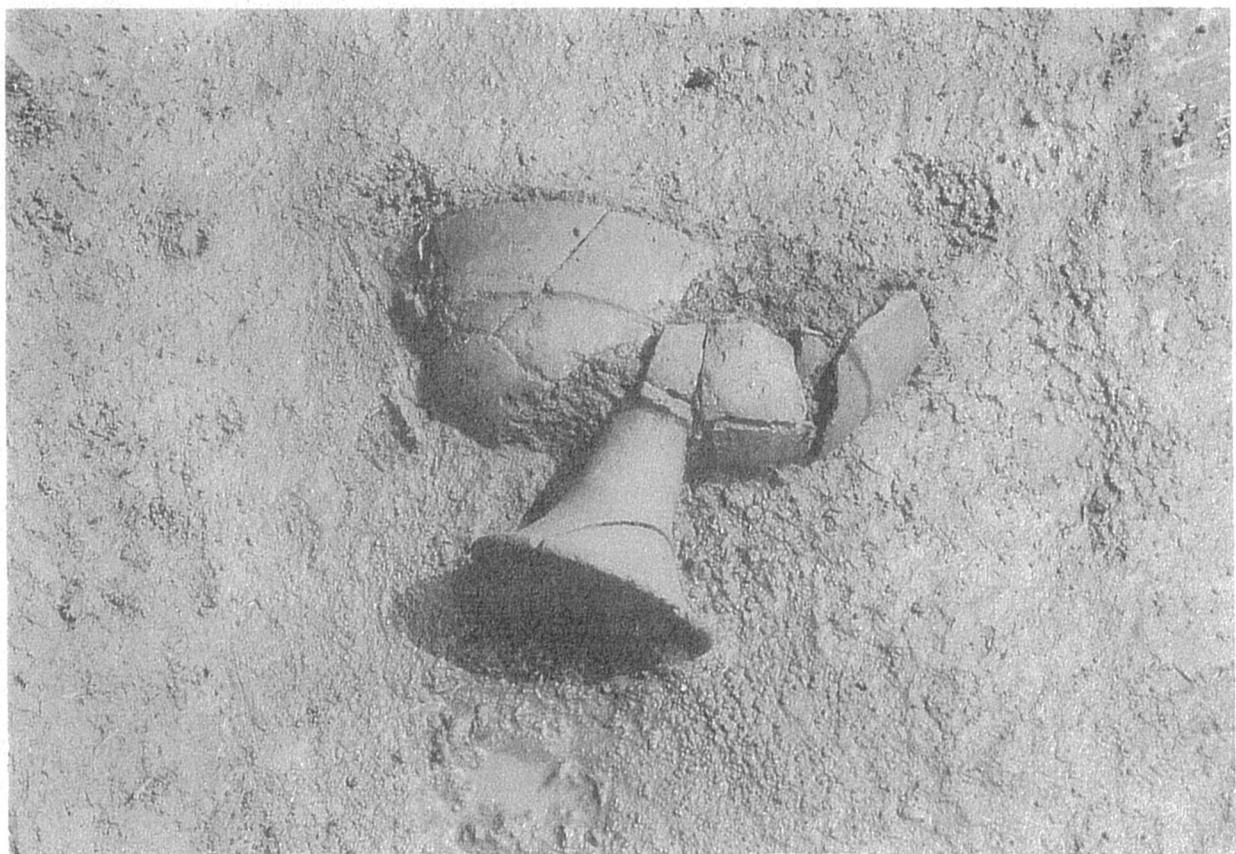
土器出土状況（第1号住居址）



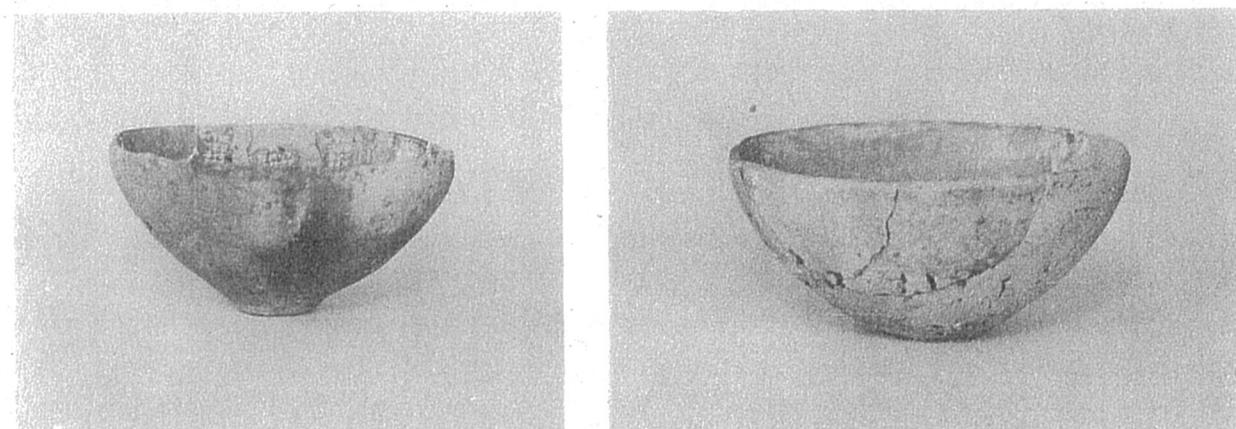
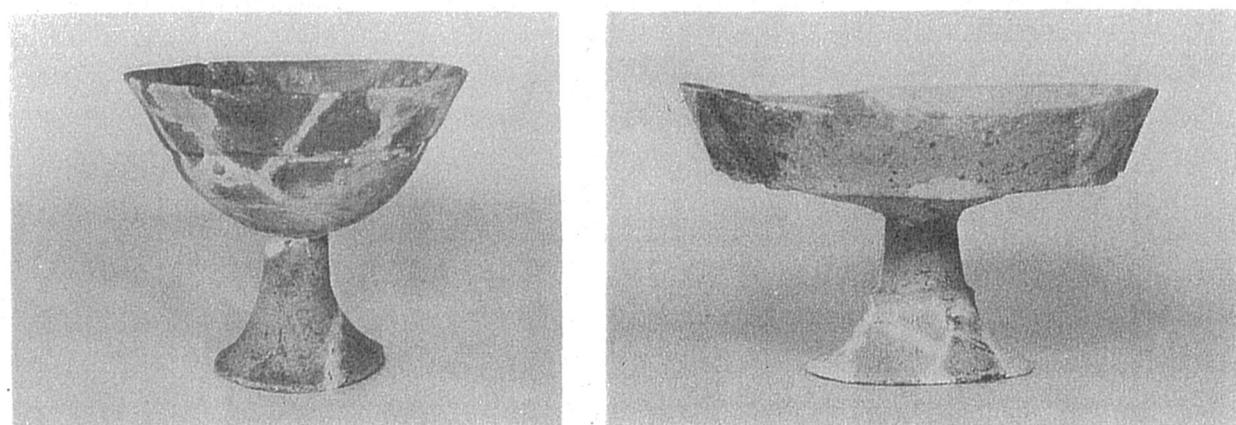
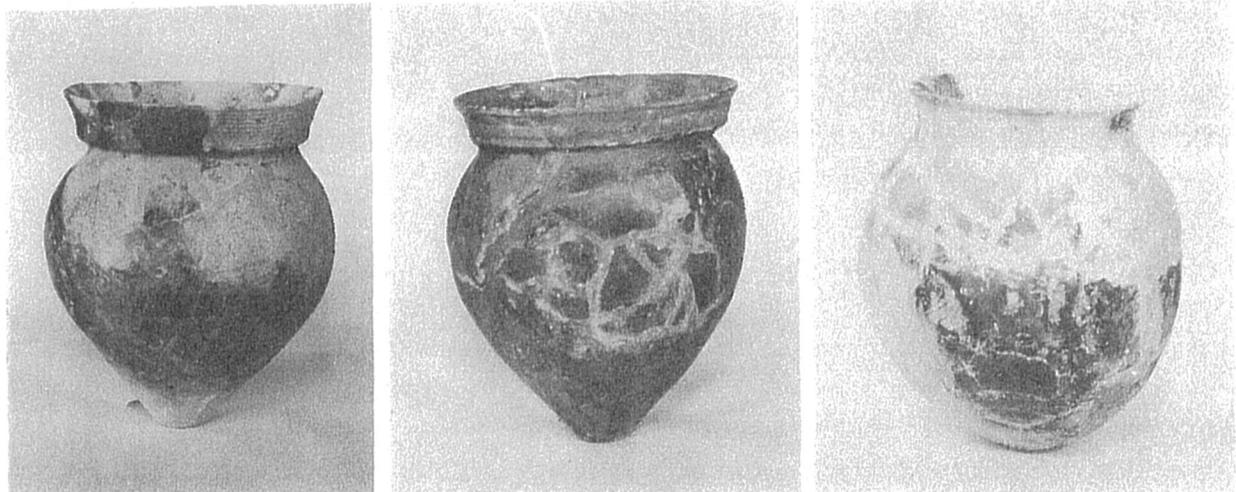
土器出土状況（第2号住居址）



土器出土状況（第3号住居址）



土器出土状況（第4号住居址）



上段・壺形土器（右、第1号住居址、中、左、第3号住居址）
中段・高杯（右、第1号住居址、左、第4号住居址）
下段・鉢形土器（第2号住居址）

大門町埋蔵文化財調査報告第2集

串田新遺跡Ⅱ

—北東地区の範囲確認調査—

発行日 昭和56年3月31日

発行者 大門町教育委員会
〒939-02 射水郡大門町大門67

編 著 中 山 修 宏

印 刷 カ マ ダ 印 刷



串田新遺跡地形図

